



水の文化

里川の
の

構想



高橋 裕「里川—これからの川と都市」

大熊 孝「見試してつくる里川」

海道清信「英国生まれのコンパクトシティ 日本に应用すると」

菅 豊「都市の川を 現代のコモンズに」

森まゆみ・陣内秀信「現代都市の里という居住地とは」

鷺谷いづみ「生きものとなが川を合作する」

水の文化楽習実践取材「川を里川化する水車の復元」

編集部「里川の構想」

古賀邦雄 水の文化書誌「里川」

水の文化 October 2003 No. **15**

里川―これからの川と都市



高橋 裕 たかはし ゆたか

東京大学名誉教授、国際連合大学上席学術顧問、世界水会議理事
1927年生まれ。東京大学第一工学部土木工学科卒業
東京大学教授、芝浦工業大学教授を経て現職。河川工学
専攻。主な著書に『地球の水が危ない』『都市と水』（2003、2004とちの若波書店）『河川にもっと自由を』（1998 山海堂）『首都圏の水―その将来を考える』（1993 東京大学出版会）ほか

川と都市は常に一体である。両者が融合してこそ、その都市は生氣に満ち。セーヌ川無しにパリは語れない。同じくテムズ川とロンドン、ウイーン、ブダペストとドナウ川、ワシントンとポトマック川。東洋ではその融合の様相が異なるとはいえ、上海と黄浦江、バンコクとチャオプラヤ川。これら都市を訪ね、河畔に立つとホッとする。

川は都市の心の流れ、市民に安らぎと温もりを与える清涼剤でもある。杜甫の「清江一曲村を抱いて流る」は、中国での川と集落とのあるべき関係を言い得て妙である。江戸時代における江戸と隅田川、そして今日もなお京都の顔というに足る鴨川に代表されるように、我が国でも川と都市の関係への考察は、その都市形成史において欠くことはできない。いやむしろ、日本人は古来、水蒸気・地下水を含めての水、川、湖沼とのつきあいに長けていたのである。その鋭敏な感覚は、日本特有の文学である俳句、和歌などに鮮明に表現されている。むしろ俳句や和歌から水気を抜いたら、もはやそれら文学はまったく潤いを無くすとき

えいえよう。その微妙な感覚は川の技術にも明瞭に見られる。武田信玄や加藤清正の治水技術は、それぞれ、甲府、熊本という町を守るためであり、その技術は自然の理への深い洞察と、住民の協力を引き出す政治力に支えられていた。

明治以後、急速な近代化の過程で、さらには第二次大戦後の復興と高度成長の段階で、日本人の水と都市の関係は、著しい変貌を遂げた。欧米に追いつけ追い越せの掛け声に支持され、近代科学技術謳歌の下、我々が古来培ってきた水との妙なるつきあいの作法は乱され、水や川を専ら数量化して評価する慣習が横行するに至った。

都市を流れるほとんどの川は、高度成長期突入のころから汚れ、臭くなり、とても都市景観を話題にするどころではなかった。「臭い物には蓋」で、都市内小河川は下水道の普及と反比例するかのようになり、暗渠になってしまった。かつては、「春の小川」と謳われた東京都渋谷駅近くを流れる渋谷川の上流河骨川も1964年（昭和39）、東京オリンピック直前に暗渠となって、地下に潜った。いまや辛うじて歌碑のみ残る数

10mの部分だけでも、元の川に戻したいものだと念願しているが、管轄の下水道行政にとつては、本来実施し得ない事業ということになる。

特に第二次大戦後、川は洪水であふれぬことを第一に、やがて都市化の水不足時代を迎えてからは、水資源を生み出してくれる水源としてしか認識されないようになってしまった。その高度成長は能率化、機械化、そして数量化万能の時代であった。なればこそ、世界を驚かした高度成長を達成したといえるのであろうが、失ったものもきわめて多かったことをも自覚しなければならぬ。それは公害に始まる環境問題に止まるものではない。都市における市民と川の関係こそ、一刻も早く復活しなければならぬ対象である。それは水質とか水辺景観といった問題を越える、人間と水との関係を問う根元的な課題である。

江戸庶民は隅田川辺りに来て、落ち着きを取り戻し、江戸の町に暮らしている生きがいを肌で感じたに違いない。

鴨川と京都と民、そして全国津々浦々の都市と川の関係も同様であった。市民が川

に接したときのリラックス、平静、安心感、それらは到底計量できるものではない。洪水や嵐で川に苦しめられてさえ、市民は川をけつして見放さなかった。そこに人々は自然への畏敬、自然のリズムを汲み取っていたのである。むしろ川は毎日その表情を変え、人間が制御し尽くせない自然であることを感得し、自然とのつきあいを錬磨する教師でさえあったのである。市民にとって川は単に洪水とか水資源、あるいは水質、そして憩いの場としてのみ関心があるのではない。それらを、総合的にとらえての自然の一角としての心のふるさとなのである。

里山の価値が再評価されて久しい。里山は湿地などとともに、高度成長期には非生産的な場所としてまったく評価されなかった。ようやく、里山の数量化できない価値を多くの人々が認識するようになった。その意味で、心のふるさととしての都市とその近郊の川は、里川と呼ぶにふさわしいといえよう。かつ、里川がその名にふさわしい処遇を受けてこそ、都市の川は真に市民の川としての地位を確立するに違いない。





里川の構想は
水の流れという資源を
使いながら保つ方法や仕組みを
改めて見直す
きっかけとなるのではないだろうか
その出発点として、異なる領域の専門家から
川と人間のかかわりや、
川をめぐる人間同士のかかわりについてうかがいました
実体として存在する川に
さまざまな人がかかわることで
里川という場に変容していく過程を
皆さんのお話から想像してみませんか

特集「里川の構想」

水の文化 15号 2003年10月

里川ーこれからの川と都市 高橋裕 2

「見直し」でつくる里川 大熊孝 4

英国生まれの「コンパクトシティ」日本に應用すると 海道清信 9

都市の川を現代のコモンズに 菅豊 14

現代都市の「里という居住地」とは 森まゆみ・陣内秀信 19

生きものと人が川を合作する 鷺谷いづみ 26

水の文化実習実践取材 佐賀 自然と暮らしを考える研究会

川を「里川化」する水車の復元 編集部 30

里川の構想 編集部 36

水の文化書誌 里川 古賀邦雄 40

水にかかわる生活意識調査から データで読む水の文化 42

インフォメーション 43

人生という時間と価値で河川の将来を考える

「見試し」でつくる里川



大熊 孝

おおくまたかし

新潟大学工学部教授
1942年生まれ。東京大学工学部土木工学科卒業。新潟大学工学部助手、同助教授を経て現職。また、NPO法人新潟水辺の会の会長を務める。著書に『川がつくった川、人がつくった川 川がよみがえるためには』（ポプラ社1995）、『洪水と治水の河川史 水害の制圧から受容へ』（平凡社1988）、『利根川治水の変遷と水害』（東京大学出版会1981）ほか

見試し：数年、様子を見ながら試行し、不都合があれば軌道修正していくという、かつてよく使われていた合意形成の方法。

里潟としての佐潟

川の話に入る前に、湿地の話をしてしまおう。ここ新潟の近くには佐潟というラムサール登録されている湿地があります。40haくらいの水面を含んだ砂丘湖です。私は以前から「ここは里潟だ」と言っています。白鳥が来る潟で鯉や鮒もいて、灌漑用水の溜池でもあります。

昔、人々はこの周辺に田んぼをつくり、潟の中のヘドロのようなものを肥料として利用してきました。これを「ゴミ挙げ」と称していました。ここは最近になって公園になりましたが、こうなると潟と人間には、公園とそれを利用する側としての関係しか残りません。長い間いろいろな使われ方をしてきた

ゴミ挙げも、近代化に伴って利用の循環が切れてしまいました。

潟が公園になると、遠方からも人が訪ねてきます。すると、もともとここに住み、潟を利用していた地元の人が浮いてしまいます。

地元の人には主に農業者で、漁業権を持つ人も多くいて、ラムサール登録湿地になっていますが、白鳥がいる時期でも漁に出ます。するとみんなから「なんだ、白鳥を追いやって」と怒られる。実際は白鳥が餌を周囲の田んぼに捕りに飛び立ってから漁をしているのですが、一般の人から見ると「白鳥を追い立てて、あんな所で漁をしている」という批判になってしまいます。漁をすることはラムサール条約でいうワイズユース（賢明な利用）、つまり、「生態系の自然の価値の維持と両立させた方法で、

人類の利益のために湿地を持続的に利用すること」をしているわけですが、「佐潟は、もともと地元の人が利用してきた里潟で、それを前提にワイズユースをしているラムサール登録湿地」という理解が、一般にはまったくくないのです。

そこで、我々「新潟水辺の会」では、ここで蓮採り大会をします。咲いているオニバスを踏んづけてしまったりするのですがね。自然保護を訴える人は「そんなひどいことをして」と言うのですが、「もともとそのような使われ方をしていた潟だったのですから、利用しながら維持管理をしていかなくってはダメなのです。だから今、取って行なっているんです」と答えるようにしています。最近では、やっとな文句を言われなくなってきましたけれど。

里川の風景

市民企業が水上バスを走らせる

信濃川河口の新潟市内には、全国でも珍しい「公共交通機関としての水上バス」がある。運営しているのは信濃川ウォーターシャトル株式会社。株式会社といっても市民株主による市民企業だ。この



広報を担当している中村文弘さん

会社の広報を担当している中村文弘さん（取締役業務部長）にお話をうかがった。

「見試し」でつくる里川

新潟市内東部で阿賀野川と信濃川を結ぶ通船川でも、私たちは活動をしています。この川は阿賀野川の川跡で、まあ汚い川の典型ですね。貯木場などもあって産業の川でもあります。昔はしじみが捕れるのですが、水が汚くなり、さらに地盤沈下の影響を受けたためまったく利用されなくなっていました。それを、もう一度みんなで利用できる川にしたいということで、活動を始めました。その一つが花筏はなかた。チューリップの球根栽培で捨てられていた花の部分を集め、花絵をつくり、それを川筏

新潟市内東部で阿賀野川と信濃川を結ぶ通船川でも、私たちは活動をしています。この川は阿賀野川の川跡で、まあ汚い川の典型ですね。貯木場などもあって産業の川でもあります。昔はしじみが捕れるのですが、水が汚くなり、さらに地盤沈下の影響を受けたためまったく利用されなくなっていました。それを、もう一度みんなで利用できる川にしたいということで、活動を始めました。その一つが花筏はなかた。チューリップの球根栽培で捨てられていた花の部分を集め、花絵をつくり、それを川筏

土地を提供してくれました。宅地を区画整理すると、よく公園をつくりますね。普通は区画の真ん中に公園を置きますが、ここでは川沿いに公園をつくりました。また、川沿いに5mの緑地帯を供出していただき、川の整備と併せて区画整理を行なった。結果として、川のイメージがプラスになったように、宅地を売り出したら完売してしまいました。



通船川でワークショップ

そのうち通船川に関連した市民ネットワークが立ち上がり、官民一体で「通船川、栗ノ木川再生市民会議」をつくりました。具体的な河川改修をするときもワークショップを行ない、議論を尽くして、通船川の改修案を検討しています。市民会議から土木事務所へ提案もしています。

ここでも6回くらい、ワークショップをしました。川の断面や護岸勾配をどうするかなど、いろいろ議論しました。それぞれの工区ごとにワークショップを行なっています。縦割り行政を越えて、川づくりとまちづくりが一体化したという意味では、画期的だったと思います。行政も含めて、みんながその気になりさえすれば、結構うまくいくことも多いですよ。

舟で時間を楽しむ

このようなワークショップを進めていくと、「昔、新潟では、各家庭に1艘ずつ舟があり、それで互いに行き来していた」とか「奥さんが産気づいたときに、舟に乗せて連れて行った」というような昔話がたくさん出てきました。舟は今の自家用車と同じように使われていたのですね。その舟を「板



1999年2月に進水した信濃川ウォータースタトル1号船「アナスタシア」

事業が始まった経緯をつかがえますか。

事業を開始したのは、1999年（平成11）です。当時、新潟には市内を循環する公共交通網がありませんでした。モノレールや地下鉄や電車を走らせようというアイデアはあったのですが、ちょうど町中に立派な川が流れていますので、舟を使い循環できないかということで舟運も選択肢に入りました。その中で、一番コストがかからない方法が選択されました。

最初は、信濃川・栗ノ木川・鳥屋野瀉・信濃川というルートで循環できないかと考えました。ただ、栗ノ木川は現在保有している舟で、低い橋桁に引っかかってしまう。そこで、取り敢えず、信濃川本川だけ運航しています。

この話の主唱者は？

新潟青年会議所（J.C）です。

J.Cのメンバーが中心になって「取り敢えずやろう！」と、始めたのがきっかけですが、もともとJ.Cで都市交通を考える委員会があり、その中で問題提起があったわけですね。その後、国、県、市の行政主導の「水面利用協議会」が発足し、船着き場などのハード整備は行政で行ない、実際の舟の運航は民間でやりましょうと棲み分けができました。

水面利用協議会…行政機関と水面利用者例えば、旅客船業者、漁協、プレジャーボート所有者などが集まった係船組合で構成されるもの。

このときに市民の株主を公募しました。「こういう事業をやりたいので、賛同していただける方一口5万円を出資してください」とお願いしたら、あつと言う間に資金が集まり、さらに、J.Cのメンバーもこそっと出資しましたので、資本金は現在2億1000万円にまでなっています。株主の数は現在約730名で、今も随時募集しています。

J.Cや市民の思いはどこからきているのでしょうか。

観光の観点からいっても、55万人口の都市の割には新潟は観光の目玉がなく、分散している。ただ、全国的に信濃川は日本一の川だという知名度が高いので、それを活用しない手はないと思いました。それと都市交通網の話がうまくかみ合って、実現につながったのではないかと思います。

「あわせ」と呼ぶんだそうですが、この言葉がワークショップを10回実施したうち、終りのころになって出てくる。そういう重要な情報はかなり時間がたたないと、地元の人から出てきません。実際、60歳以上の人はみんな舟を漕げるんですよ。

水辺の会でも舟をつくり、今年からイベントのときに使っています。彼らはひよひよいと漕げる。しかし、若い連中は漕げません。こういうことは、今ならまだ伝承できます。私たちは、こういった里川の技術を伝える活動もしています。

新潟の水辺を考えるには、信濃川だけでは語れないし、通船川だけでも語れない。阿賀野川から信濃川を全部一体として見ています。今年は信濃川に2回ウォーターシャトルを出して、60km上流の大河津分水までのんびりと旅しました。6時間かかりましたが最高の気分でしたよ。春は桜や桃の花が見え、7月は桃の丸い果実が見える。観光ルートとして利用してもいいでしょうね。

そこで「6時間かかることを、どう思うのか」という問題があります。「今の日本人では退屈してしまう」という人もいるでしょうし、いろいろな議論があると思います。しかしこれからは、ゆった



右：信濃川と阿賀野川を結ぶ通船川。上：この川づくりのために、何度もワークショップが開かれた。写真：（新潟県新潟土木事務所『通船川河口ワークショップの歩み』）より

りした時間こそが大事という価値観が大切なのではないでしょうか。現にイギリスでは、ナローボートと呼ばれる幅の狭い舟で運河を1週間とか2週間かけて楽しむのが、ポピュラーなアウトドアレジャーになっています。いずれ日本も、そうなりますよ。もうすぐです。高度経済成長期は「1分1秒争って働け」と言われ、我々も必死になって働いていたわけですが、

最近になってふと気がつく、週休二日制で、定年後も結構時間があふ。時間に対するものの見方が、考え方をええねばならない。今まで効率一辺倒だったが、これからは、時間をどれだけ楽しく過ごすことができるかが課題になるはずですよ。

魚が上り、資源を分かち合うのが流域

—— 流域というスケールについては、どう考えますか。

流域という言葉が出てくると、広がりがすぎて、焦点がぼけてしまうと思います。三全総（第三次全国総合開発計画、1977年（昭和52））から流域という言葉が使われ始めましたが、いまだに漠としているようです。

江戸時代の信濃川なら、流域から新潟に物資が集まってくることで明確に目に見えたので現実として流域を意識しやすかったのですが、今はそういうものがありません。あるとすれば、それは鮭であり、鱒であり、鮎だと思おうのです。江戸時代は290km上流の松本に、鮭組合があったんですよ。5万匹捕れたという記述があります。けれど、今は途中でダムがいっぱいあるから魚が戻れない。つ

全国でこのような水上交通を営業している都市は、現在少ないですね。

東京、大阪の主要都市と、新潟だけです。遊覧船は各地にあります。定期的な輸送手段として機能している例は、この他はありません。

しかも市民株主で運営している。

資金調達に市民が参加しているのは、当社だけです。730名の中で、市民の一口株主は半分強になります。株主数が700を超えている企業は地元でも珍しいでしょう。まあ、舟を通じて市民の方とつながり、地域づくりに役立てればということですね。

なぜ市民株主なのか？ ということですが、みなさん私たちの夢

に出資しようという方がほとんどです。行政とパートナーを組むときに、市民の後押しをいただいていますので心強いですね。これが1〜2社が大金を出資して設立した会社ならば、そうはいかなかったでしょう。市民がお金を出して運営している、市民の声を一部を代弁して行なっている、という意味合いがありますので、行政も協力的です。

考え方としてはNPOと同じですよ。

まったくそのとおりです。今年の7月からは競合企業が1社参入しました。

利用客からすると、いい補完効果ですね。

そう思います。今まで当社が2艘所有し、1時間に1本しか運航できなかったわけですが、競合企業が入ることで30分に1本となる。客の乗降頻度が上がり、顧客にとっても非常に良いことだと思います。実際「30分くらい待ってれば舟がくるからいいね」という声を聞くようになりました。

乗客の評判は？



昭和大桥はウォーターシャトルがくぐる

立ち上げ当初から3年は、船着き場が今のようにはありません。万代島（仮橋）発着の周遊船でした。現在の終着地点である朱鷺

まり、ダムをつくることで流域を分断する結果になっています。

阿賀野川にも河口からたくさん
の鮭が上ってきていました。周りの人は、それを使って生活をしてきた。その恵みは、魚を捕らない人にも必ず配分がありました。山代やましろと言って、漁獲量の5%くらいを捕獲した集落に置いていく習わしです。その集落は山代をいったん貯めておいて、お正月になる前に餅をついたりして分け合いました。川の恵みを限られた人だけが独占するというのではなく、漁師でない人にも恵みが配分されるという仕組みが存在したのです。ところが、今は17の発電ダムのためだけの川になってしまっています。同じことが信濃川でもあります。ここにはJR東日本へ電気を供給しているダムがあり、これが東京の電車を動かす25%くらいの電力をまかなっています。ところが、すぐそばの信濃川沿いを走っている飯山線は電化されていません。これは大変おかしなことで、本来は地域の人に恵みを分け与えるべきなんです。発電してもいいけれど、もう少し水を返してくれれば、河口から鮭が上ってくることもできるのです。「昔おらつちが遊んでいた川がからからで、遊びもできないじゃないの、昔の川を返してよ」といって、この辺り

の人は運動を始めています。流量を増やせということです。

「里川」の設計条件

これからの技術者は、治水と利水だけではなく「子供が遊ぶ」ということも設計条件に入れるべきです。生産に直接役立たないものは評価しないというのは、不公平ですからね。里川では、そのような価値観が大事になるでしょう。川は多くの人にとって多様な意味をかかえている。そこで遊んだということも、その人の心の糧になるわけです。

—— 里川をつくるときには、具体的にいくつも設計条件があるのでしょうか。

それを知るためには、住民参加でみんなの意見を聞く以外ありません。今の住民は、いわゆる「常識」で考えている場合も少なくないですから、単純に聞いただけではだめです。やはり、時間をかけることが大事です。

先程申し上げた「板合せ」という言葉が充分な話し合いを経ないで出てこなかったように、信頼関係ができなければ、本当の情報が出てこないわけですね。ですから、充分時間をかけて、何でも言える



万代橋上空から見た、新潟市中心部を流れる信濃川

ようにお互い信頼関係を築く必要があります。技術者側も広い気持ちを持って、ちよつとした言葉でも見逃さないようにしなければなりません。我々は「板合せ」という言葉を聞いてばつと反応できましたが、これは十数年間、水辺の活動をしてきたからです。それにはやはりお互い時間をかけて成長しながら、知識をストックしないとだめですよ。

—— ワークショップを各地で行かない、合意による川づくりをして、川は土地によって利害も異なりますから、上流中流下流で辻褃

ムツセの船着き場は今年の5月に完成したばかりで、お客さんからは「船着き場がたくさんできればいいよね」という声がありました。河川を管理しているのは、国と新潟県ですから、「民間企業に公共の岸は貸せません」という原則があり、自由に発着所はつくれませんでした。今は国と県の協力もあり、4力所の発着場を整備していただきました。

市民会社であるにもかかわらず、もつと利便性が高い橋の下などに発着場を持つとしても、いろいろハードルがあるわけですね。

そうですね。今年4月からは朝の通勤時間帯にも就航しています。が、発着場所の利便性は必ずしも良いとはいえません。バス停はマンションのように人がたくさん居住している所がありますが、船着き場はそういう人が住んでいるスペースから離れた所にある。そこまで行くのにバスや車に乗らねばならない。これでは利用が増えるはずはありません。実際、市民の方からもメールや手紙をいただいで、この橋の下に舟を着けると利用が増えると思います、という声もいただくんですよ。でも、調査すると、自由に船着き場を設けられないという行政の壁にぶつかります。

年間利用客数は？

初年度から3年目までは、年間約1万8000人くらいでした。これには季節格差があります。1、2月ごろはただでさえ船着き場が遠いのに、そこまで行くのが寒くて大変なので、少なくなります。

それと、川の両側には車がたくさん走っていて、川が道路で寸断されているんですよ。しかも信号が非常に少なく、車はスピードを出して走る。利用客が川へ渡ろうとすると、平気で5分くらい待たなくてはなりません。今までの行政施策では、川に背を向ける道路整備を行ってしましたので、今さら川に向けようとしても、根本的なところから直していかないと、市民に利便性を提供できませんね。橋の下に船着き場をつくるにしても、河川管理している窓口と道路管理している窓口が一つでない、両方にマッチしたような整備はできません。

お客様は、水上バスに乗ると大変喜ばれます。まず、川から自分の住んでいる町並みを見ることがほとんどありませんから、「目線が変わって非常に良い」と言われます。車で移動するとせわしないけれど、舟で移動するとゆったりして良いとも言われます。こうした体験から、川への愛着が生まれます。市民の目が川に向けば、「なぜ、こんな不便な所に船着き場があるんだ」という声が上がってくるようになるでしょう。こうした声が、利用しやすくする第一歩かもしれません。

が合わない場合も出てくるでしょうね。

「地形条件、自然条件は大切にすべき」ということを、基本原則にすべきでしょう。例えば信濃川を例にとると、長野県と新潟県はよく対立します。信濃川・飯山市の南方に立花(たてがは)という狭窄部(きょうさくぶ)があります。上流部(かみりゅうぶ)にしてみれば、そこ

里川の風景

里山の粗朶を利用した

粗朶沈床

粗朶とは里山の樹木から伐採した木の枝のことで、栗、櫟、樺、クヌギや、雪国で育ったエゴ、ナカマドなど、木によってさまざまな特性を持っている。この粗朶を格子状に束ねて石を詰め、河床の侵食の防止を目的に、川底に沈めた伝統的工法が粗朶沈床である。明治初期に、デ・レーケらオランダ人技師が伝えたもの。昭和30年代まではよく使われていたが、高度成長期にセメントが安くなり、山林が針葉樹の人工林に変わってからは、ほとんど利用されなくなった。

しかし、最近ではこの工法が生物の生息に適しており近自然工法の一つの典型と考えられ、注目されている。さらに、粗朶には山林

を広げれば流れが速くなって水害が起きにくくなりますが、反対に下流は水害が起きやすいというところで、決定的な対立があります。明治時代以降、少しずつそこを広げてきましたが、上流のほうは今でも「もっと広げる」と言います。長野県の脱ダム委員会でも、最後には「そこを広げる」と言っています。このことは、安全度をどこ



の間伐材を使うことができ、山林の維持と合わせ、地元の自然資源の循環利用という点でも期待される。治水工法に地元の樹木と伝統の知恵を取り入れる。これも里川の使い方だろ。

大熊孝さん、中川武夫さん(北陸粗朶業振興組合)のお話による。

まで上げるかという議論にもなっています。私は、従来の地形条件で、ある程度安全度が上がったならば、それ以上は地形を壊すべきではない、と考えています。

—— それ以上のリスクは住民で引き受けるべきということですね。

そうですね。そして、どの辺で線を引くべきかが問題になります。

以前、私は「70〜80年に1回の水害なら受忍すべきだ」と言いましたが、最近では私より進んでいる人もいて、「30年に1回の水害なら我慢しよう」という人も出てきていますね。30年に1回の床下浸水くらいなら我慢します、というわけです。これを前提に治水計画を立てれば、川の姿も変わってくるでしょう。

ただ、個々の居住者の我が身の問題となると、納得できないかもしれない。しかしそのときに一人ひとりに考えてほしいのは、80年に1回の水害を受け入れることで、その人生をどれだけ豊かに過ごせるかということです。そう言うのは、今の治水の方策が「水害は何がなんでも許さない」という基準で進められているために、少なからず親水の要素が犠牲になっていると思うからです。

多様な人が多様な価値観から見

た365日の川の姿があるわけですが、今まで「100年に1回の水害も許さない」という治水対策のために、川と親しむ空間をないがしろにして、川の多様性を否定してきたように思います。豊かに過ごすという立場から考えると、本当に「もつたいないなあ」と思

います。どこに価値観を置くかということを考えないと、個人と社会の意思決定はできません。具体的に「それを認めると、本当に毎日楽しい生活ができるのだろうか?」と、問いかけ続ける必要があるでしょう。やっとなような問題提起ができる時代になったのではないですか。

—— すると、川も「当事者のかわり合う空間」を、「人生」という時間と価値で考えなくてはいけませんね。

そのように川を考えるための空間単位は、ある程度自然条件の中でくくって議論することになるということです。ただ、信濃川の場合はやはり流域でとらえるには大きすぎるし、難しいですね。地形の条件で、狭窄部の存在などを前提としていけば、上流と下流は分けて考えてもいい部分があります。それぞれの川に応じて、コミュニティレベル、県、上流、下流、流

域、国、とそれぞれで処理しなければならぬ問題を話し合っているのかなと思います。

—— 流域委員会という発想は、里川をつくる一つのツールとして有効でしょうか?

有効でしょう。行政も含めて、固定観念を外せばいい。もしも外すことができれば、淀川流域委員会のように、みんなが本気で議論をして、良い結論を出せるのです。里川をつくる方法論として、私は、基本的には話し合いしかないだろうと思っています。どのレベルでもとことん話せば、解決の光は見えてくる。

江戸時代は、話し合いで物事を決めるのがうまかった。例えば新たに用水を取るために既存用水と利害が対立するときなどは、数年の様子を見ながら試しにやってみて、不都合があれば軌道修正していくという方法が採られました。これを「見試し」と呼びます。農民間で選ばれた名主などを中心に、対話で折り合いをつけていった。川をつくり、保ち、楽しく暮らし、後の世代に責任を持つ気持ちで川を守るならば、この「見試し」の習慣は、みんなが身につける必須の道具だと思っています。



川の立場で考えると、持続可能な都市像を描けるかもしれない

英国生まれの「コンパクトシティ」

日本に応用すると

「コンパクトシティ」への 関心が高まっている

コンパクトシティという考え方はヨーロッパで生まれ、1990年（平成2）ごろから主にイギリスで議論されてきました。背景には地球環境問題があります。20世紀は「都市の時代」と言われ、前半は公共交通の発達、後半は自動車交通の発達で、都市がどんどん郊外に広がっていきました。ところがその結果、地球環境がおびやかされている。今後は、持続可能な発展を世界レベルで考えねばなりません。

注：持続可能な発展・開発（Sustainable Development）：1987年に国連が「環境と開発に関する世界委員会」を組織し、増大する環境危機と、開発途上の開発問題の折り合いをどうとつづけるかが話し合われた。そ

こで、持続可能な開発が望ましいと打ち出され、「Our Common Future（地球の未来を守るために）」という報告書が提出された。以後、持続可能な開発・発展という用語が一般に用いられるようになった。この報告書では、持続可能な開発を「将来の世代のニーズを満たす能力を損なうことがないような形で現在の世界のニーズも満足させること」とし、将来世代のことも考え、環境や資源を長持ちさせるように利用しなくてはならないという意味で用いられている。

持続可能な発展を実現する方法はいろいろありますが、都市の場合で考えると、郊外に広がる都市には二つの問題がある。一つは郊外にもともとあった自然や農地を潰してしまうということ。第二は、移動手段として車を多用すれば、それだけCO₂が発生するとともに、化石燃料を消費し資源の枯渇につながるという点です。そこで、できるだけ車を使わないためにも、都市を外に広げないほうがよい。つまり、都市はコン

パクトにまとめ、郊外化せず、密度の高い都市にすべきではないか。徒歩や自転車移動できる範囲で買い物や通勤や病院や福祉施設、そして住居が固まって住めば、あまり車を使わなくてもよい。そうすれば車を使えない高齢者などの不利益も克服できるし、人口密度が高まれば新たな文化が生まれる可能性もある。これが、コンパクトシティの大まかな考え方です。

イギリスの先例 歴史があるからこそ 成立する

しかしよく検討すると、コンパクトシティという考え方は、イギリス人の田園志向を抜きにしては語れません。イギリスの人々の暮らし方を見ると、歴史的に都市圏

から田園や小さい町にすぐに移動してしまうことがわかります。国の経済の源泉が都市の力にあると考えるならば、できるだけ人口と産業を都市に留めたい。そのため、都市の密度を高め魅力を高めておきたい。イギリスでは人々の「田園好き」が強いために、逆に政府としては都市に人をつなぎとめようという考え方が、今でも強いのです。

そもそもイギリスの都市の歴史はそれほど古くありません。都市文化といえばフランスを思い浮かべますが、パリ中心部のアパートに住み、都市生活を楽しむ、週末は郊外で楽しむ。これがフランスの都市のライフスタイルです。ところが、イギリスの都市は産業革命が始まってから発達しましたので、イタリア、スペイン、ドイツ、



海道清信

かいどう きよのぶ

名城大学都市情報学部教授
1948年生まれ。京都大学大学院
工学研究科博士課程単位取得退
学。地域振興整備公団を経て現
職。主な著書に『コンパクトシ
ティ』（学芸出版社2001）『地域
共生のまちづくり』（共著/学芸
出版社1998）ほか

コンパクトシティ9つの原則

<空間の形態>

1. 高い居住と就業などの密度
人口密度や住宅密度が高い。密度が高くなると、環境上の問題が発生する恐れが強くなるため、環境の質を高めるためにも、都市デザインの役割が重要となる。
2. 複合的な土地利用の生活圈
一定の生活圈の中で、複合的な土地、建物利用が行なわれている。住宅や就業などの単一機能の密度が高くてもコンパクトとはいえず、多様な用途が一定の範囲で複合されていることが必要とされる。
3. 自動車だけに依存しない交通
自動車交通への依存度が低い。生活圈の中や都市中心部などを自由に歩き回ることができ、徒歩と自転車利用がやすく、公共交通の利便性が高い。自動車を利用した移動の高さではなく、必要な場所やサービスへの到達のしやすさが重視される。

<空間の特性>

4. 多様な居住者と多様な空間
年齢、社会階層、性別、家族形態、就業など、居住者とその暮らし方の多様さ、建物や空間の多様さがある。多様な住宅が共存していることが重要で、家族形態などが変わっても住み慣れた地域で住み続けられ、居住の継続性と地域の安定性が得られる。
5. 独自の地域空間
地域の中に、歴史や文化を伝えるもの、他にないものが継承され、他とは違う独特な雰囲気を持っている。歴史的に形成された場所、建物、文化などが大切にされ、活かされる。開発にあたっては、場所性の感覚が重要となる。
6. 明確な境界
市街地は、地形や緑地・河川などの自然条件、幹線道路や鉄道などのインフラ施設などで区切られ、物理的に明解な境界がある。田園地域や緑地に、拡散的にあいまいに市街地が広がっていない。

<機能>

7. 社会的な公平さ
年齢、所得、性別、社会階層、人種、自動車利用、身体機能などいろいろな特徴を持った人々が、公平に生活できる条件が確保される。特に地域で自由に移動できて必要なサービスが受けられ、住宅が確保され就業できることが重要である。
8. 日常生活上の自足性
徒歩や自転車で移動可能な範囲に、日常生活に必要な生活機能が配置され、地域的自足性がある。狭い近隣だけで充足できる機能は限られているため、広域的なサービスを利用できるような交通手段の整備なども必要である。
9. 地域運営の自律性
そこに住む市民や住民の交流が盛んでコミュニティが形成され、地域の現状、将来に関する方針の決定や運用について、主体的に参加できる地域自治がある。他の圏域との連携も必要となる。

海道清信『コンパクトシティ 持続可能な社会の都市像を求めて』(学芸出版社 2001)

フランスに比べると都市のライフスタイルを支える都市文化の厚みが薄い。そこで、ますます政策的に都市を再構成し、都市的な文化をつくることを目指すわけです。

ところが、人々は「都市は労働者の住む所で、住環境も悪い」というイメージを持っています。このため、田園志向の人々が「都市は豊かで、住みやすく、文化的だ」ととらえてくれるよう、政策的にコンパクトシティを強く打ち出し、たという経緯があります。

コンパクトシティの出発点は地球環境問題ですが、イギリスの例

でいえば政策モデルとしての都市再生の論理になっています。

コンパクトとは何か

ヨーロッパの都市計画における土地利用は、住宅地、工業地、商業地と明確に分かれています。コンパクトシティの特性は、「高密度」であることと「複合機能」を持つているということ。ひらがえって日本の土地利用を見ると、かなり高密度で、しかも混合用途。ここだけを見ると、日本の都市はコンパクトシティであるか

のように誤解されてしまうのです。しかし日本の都市をもっとよく分析すると、自然発生的な高密度であり混合用途であって、コンパクトシティとして機能しているわけではなく、ごちゃごちゃしているだけなのです。それを分離して再編していこうというのが、日本の都市計画の最近の動向です。つまり、ヨーロッパの場合は「画然と分かれているものを合わせて、複合機能にしよう」ということですが、日本の場合は「ごちゃごちゃしているものを整理し、望ましい形に複合しよう」ということで、

同じ「コンパクト」と言っても、出発点の前提と、目指す方向性がまったく異なります。

さらに、コンパクトシティでは、高密度をプラスに評価しようとしていません。しかし、かつて都市の歴史を見れば、密度の高い地区というのは狭い家に5人も10人も住むようなスラム地区を意味し、密度が低いほうが良い居住環境であるという考え方が、都市計画思想において常識であったわけですから、もしこの都市像を進めるならば、密度が高くて快適な住環境を具体的に示さなくてはなら

ない。そのモデルの一つとしてアーバンビレッジがあります。

都市開発に、人口密度が高く、コミュニティや職場もあるアーバンビレッジを持ち込もうという計画が、ここ5、6年の間にイギリスで広がっていて、ドーチエスタ州・パウンドベリー(イギリス南部)にあるチャールズ皇太子の敷地でもニュータウン開発をしています。基本は、村があり、路地があつて、密度が高く、人間的なスケールがある。そして、都市と田園の境界がはっきり分かれていて、外側には広大な田園が広がっ



環境都市としても有名なドイツ、フライブルグ。まち全体がコンパクトにまとまり、市内各所で水が流されている。(写真提供：海道清信)



コンパクトシティを日本に应用すると

ている。ここは不動産商品としてもよく売れているそうです。これはイギリスの例ですが、アメリカでもこのような考え方が現れています。アメリカ的な都市は車を使って郊外に向かった結果、エッジシティと呼ばれる郊外都市が多数生まれました。逆に、母都市の中心地は衰退していきまます。このような歴史に反省があり、スマートグロースという都市の成長を賢明に管理していこうという政策により、郊外化を抑えようとしています。

日本の人口は今後ますます減少し、高齢化も進みます。これから郊外の都市需要は広がりにません。このため、政策対象として都市の中心部をいかに活性化させるかが一つのテーマになっています。「都市再生」という言葉で表される内容も、そのようなものが多いといつてよいでしょう。

しかし、日本で郊外化を抑制しコンパクトシティをつくるという点も、いろいろな障害があります。まず、日本の場合は郊外に広がるスプロールの開発、つまり、小単位の宅地開発が市街地の外へ虫食いの無秩序に広がる現象をコントロールする手法を持つてい

ません。1967年(昭和42)につ

くられた都市計画法では、都市の土地利用に秩序をもたらすために、現在あるいはこれから開発を図る「市街化区域」という内側と、市

外化を抑制すべき「市外化調整区域」という外側の間に線を引きました。しかし、市街地の拡大は防げませんでした。

線引き後の30年間に増えた人口は、外側で半分、内側で半分です。ですから都市人口を市外化区域の中に取り入れるという面では、都市計画法は成功したとは言えないのです。今のところ、市外化区域を越えて広がった住宅地を、市街地と呼び戻すという実地的な手法はありません。

また、農地の問題があります。現在の農村は、農業だけで生計を立てていくことが難しい状態にあ

ります。農業者は地主であり土地所有者であるという立場であるため、もし農業者が土地を有効にしたいと思うなら、農業以外で使うしかなく、都市的な用途での使用を助長する結果になります。

現在の都市計画でかなりの行政担当者や専門家は、都市をコンパクトにしたいという方向で考えていますが、日本の土地利用制度は都市の分野と農村の分野が一体になっていません。そのため現在は農村の方が積極的に開発を引き込む結果になっています。

つまり、郊外化を助長している力が強く働いているということが、日本特有の問題になっていきます。これが先程述べた、日本の土地利用はこちやこちやしているということの意味です。

里山は大切で、開発が進めば今まできれいだっただ小川が汚れてしまふことは、農業者もわかっています。しかし、背に腹は代えられないということ、どんどんスプロール開発されていく。ですから都市近郊の農村では、田園や農業水路などの自然空間が失われ、コンパクトなシティをつくるという方向には動いていません。

都市と水の関係

居住地と水辺の関係を見たとき、

日本の場合は水害があるためか、何となく川沿いに居住地としての良いイメージがない。ところが、欧米の場合、川辺は良い住宅地として認められていますし、不動産価値も高い。

イギリスには全部で3200kmの運河がありますが、2007年(平成19)から100年ぶりに運河を新設するという計画があります。新しく発展しているミルトンキーンズというニュータウンから、ベッドフォード市まで延長約32kmの運河を掘るので、なぜ掘るのかというと、一緒に住宅地開発をするため、川沿いの住宅地を人々が求めるからです。宅地価格が18%上昇すると予測されており、住宅供給の手法として運河をつくるという例です。

ヨーロッパではみんな、川にプラーズの価値を置いていますね。イタリアの山岳都市などの例外はありますが、総じて都市は川のそばで生まれています。かつてドイツのマイセンでは川に閘所を設け、川通行税を取っていた。そのように都市の歴史と川が密接に結びついています。

都市の中に水が流れているという点で面白いのは、環境都市で有名なドイツのフライブルグでしょう。もともと川縁にできた都市ですが、町中に水路が張り巡らされ、

きれいな水が流れ、それを守ることで都市づくりの大きな目標になっています。市街地を拡大させないように努め、公共交通を発達させ、ソーラーシステムなどの自然エネルギーを使うなど、いろいろな取り組みをしています。町の中に水を活かすという点で、フライブルグの試みは大変参考になります。

都市の多様性維持に 役立つ川

コンパクトシティを目指したときに問題視されるのは、それぞれの都市が個性を持って自立することです。日本では都市間競争によって、同じような没個性的都市が生まれ、地域の多様性が失われたといわれていますが、これからの時代は、逆に、個性とか多様性を高めないとなりません。

今までは、それぞれの都市がそれぞれ1セットずつ同じものをつくり、都市機能の「量」で勝負をしてきました。その結果、似たような郊外団地、住宅、ショッピングセンター、駅前があふれる結果になりました。どの写真を撮っても同じに見えて、どこだかわからない。これでは、東京や大阪などに大都市の量の論理で負けてしまっています。

今までは都市の形成期だったので、仕方がなかったかもしれない。しかし現在は、そのような都市を地域の多様性を持った都市に再生する時代です。再生という局面では、地域の個性を活かすことで、広域レベルでの多様性を持つことになります。小さくてもその都市が持っている個性で勝負することは、従来の「都市間競争」という言葉の意味とは異なってくると思います。個々の地域がこれから目指すべき方向でしょう。

個性と多様性を融合させる上で、有効な要素となっていくのではないのでしょうか。

例えば、現在の大阪・道頓堀は店が堀に背を向けているのですが、堀沿いに散歩道をつくり、店の入り口を堀側にもつけさせようという活動が始まっています。

さらに川が持っている環境緩和機能は非常に大きいもので、都市計画の上から無視することはできません。川には、大気より夏低く、冬暖かい水があり、周辺に緑が多いという条件があります。加えてオーブンスペースということもあって風の道にもなる。川は、ヒートアイランド現象を緩和する機能を十分に持っているのです。

川の立場で考えてみる

長野県の飯田市に、戦後できた有名なりんごの並木道があります。それをうまく活かす形で町を整備するというプランが進められています。住民参加でさまざまな提案を検討するのですが、地元のお母さんが「主役はりんごだ。りんごにとつて良いか、ということを計画を検討するときに考えましょう」と提案しました。例えば、マンションが建つて日陰になると、りんごにとつて悪い。車が増えるとりんごにとつて悪い。すると、りんごが喜ぶ環境というのは、地域の人々が喜ぶ環境になるというわけです。りんごを主役に地域の要素を評価することで、良い再生ができたという好例です。

語ると、都市の中の川と人間の関係がよく見えてくるかもしれません。人間にはさまざまな利害関係があつて、なかなかまとまりませんから、川の望みを公の意見としていくのは、良い方法かもしれません。

コンパクトシティを 日本につくるには

現在の日本では、郊外の都市を削って緑地にして、人には都心に戻ってきてもらう、という都心回帰の理念を、都心再生の一つの形と考えている人もいます。しかし、郊外の宅地には、長期のローンを抱えて居住している人が存在しているわけです。それを勝手に緑にするといつても、筋が通らないでしょう。それに、現在の郊外居住者のすべてが都心に移れるほど、都市に容量はありません。日本人は郊外化のスピードも速かったけれど、都心回帰に飛びつくのも速いですね。郊外化した居住者を都心に誘導する考えは、長期的には良いとしても「穏やかに進める」ことが大事なのではないでしょうか。現実的な問題として、現在の郊外都市は長所を活かしながらか住み続けることができるように、サステイナブルな郊外に再編されなくてはなりません。



東京・多摩ニュータウンにつくられた人工のせせらぎと、大阪の道頓堀、里川にするかどうかは、使い方が異なる。

そのためにいろいろな方法があると思いますが、「母都市の衛星都市」ではない、独自の自立的な町の固まりをつくっていくことも一つの方法でしょうね。日本には、昔から大都市の近くに歴史的な中心地がありました。名古屋の周辺についていえば、犬山や一宮といった地域がそうです。現状としては、郊外化に飲み込まれて中心性を失っていますが、もう一度中心的な都市として再生する必要があります。2時間もかけて大都市に通勤するのではなく、近くに職場をつくるのも方策の一つでしょう。高齢者も多い地域ですから、フルタイム職場だけではなくパートタイムで働ける職場もつくと、一層いいですね。

サステイナブルな郊外に再編する場合、川辺や水辺の歴史性を活かすことも大事です。ミニスプロールした場所は原野に戻すということも効果があるでしょう。その際、「川」というより「流域」で考えることが大切です。例えば、日本では上流が開発されて流出係数(総雨量に占める流出量の割合)が増えると、下流の大都市で都市水害が起きるケースが多い。

また、福井県のある市は湧き水で有名な素晴らしい町でしたが、水源地を開発してしまったために、湧水がほとんどなくなってしまう



英国の田園地帯の水路では、ボートを楽しむ家族をよく見かける。下はテムズ川。(写真提供:海運通信)

ました。上流と下流がつながっているという考えずに開発してしまったから、町の魅力もなくなってしまったのです。これからは、上流と下流が持ちつ持たれつの共存関係をつくることを目指すべきです。上流で自然の治水力を活かし、下流で「水辺によって都市的な環境を楽しむ」という都市をつくるというように。森を守ったり、水源を守ることが都市を守ることにつながる、という考え方が不可欠です。

コンパクトシティというと、ある一つの都市像をイメージする人が多いのですが、もとは「持続可能な開発」を目的にしていますから、私は広域の都市間のネットワークを考えた上で、一つのまとまった都市像を提供する考え方であ



ると思っています。日本の場合は「広域」という概念に「流域」という範囲を入れることも重要です。

コンパクトシティを誤解しないでほしい

コンパクトシティは、当然のことながら万能ではありません。土地によってコンパクトの意味、つまり、「高密度、複合機能」の基準が異なりますから。単にコンパクト化すればいい、というわけではなく、みんなで話し合って評価して合意形成しなければなりません。

もしかしたら、今まで氾濫原としての機能を果たしていた場所を宅地化して、「これもコンパクト化です」と言うケースが出てくる

かもしれない。このような本末転倒の事例を生まないためにも、その開発が持続可能性を高めているのか、地域の定住性を高めているのか、住み良い条件をつくっているのかなどを見て、合意形成の過程で正しく評価しないとダメです。どの地域においてもコンパクトそのものが良い、というわけにはいかないのです。やはり一つの物差しで判断するのはだめで、地域の人々が時間をかけて多様な物差しで意見を出し合って、心から合意して納得してもらわなければなりません。

日本では、「これからは都心居住が良い」という論調が一般的で、その結果、町の中に集合住宅が建てられて建築紛争も起きています。都心居住とか町中居住という言葉の響きはちよつと聞いたところでは良さそうですが、プロセスを間違えると紛争を起こして、逆にコミュニティを壊してしまう危険性もはらんでいます。何度も言いますが、進め方は地域の特性を考えなければなりません。

また、行政の力が弱まっている中で、「都市政策は企業主導で市場原理に任せようが良い」と唱える人たちが、現在の政策に影響を持っていることも問題のように思えます。しかし本来の都市は弱肉強食を許さず、弱い人も一定の生活ができ、それが強い人にとつてもトータルではプラスになるという場なのです。企業も一定の抑制をしてマーケットを小さくすることで、住民と企業が町で共存共栄できるわけです。野放図にすると、弱肉強食的な競争を招くことになる。それよりも一定の規制と誘導で、町と企業がともに栄えるような状態をつくるのが必要です。

都市の不動産取引に市場原理を持ち込み、一方的な規制緩和を進めるべきと唱えるための根拠として、コンパクトシティや都心居住が方便として使われているケースもあります。ですから、重ねて申し上げますが、固有の地域ごとに、コンパクトの意味と価値をよく考えてほしいものです。

結局、コンパクトシティというのは判断基準を示した都市像ではなく、持続可能であるための一つの都市形態ということです。あくまでも目的は持続可能性ということであつて、コンパクトではありません。そして、その実現プロセスとして、都市レベルと、広域レベルで地元に適した都市像を話し合い、チェックするプロセスが必要ということ。そのとき、川は重要な指標になりうる存在なのです。



サケ川の伝統に組み込まれた、資源を守る仕組み

都市の川を 現代のコモンズに



菅豊 すが ゆたか

東京大学東洋文化研究所助教授
1963年生まれ。筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科・民俗学・博士(文学)、国立歴史民俗博物館助手、北海道大学文学部助教授を経て、99年より現職。主な著書に『現代民俗学の視点』(分担執筆/朝倉書店1998)、『景観の創造』(分担執筆/昭和堂1999)ほか

コモンズとは何か

コモンズという言葉が盛んに使われるようになったのは、生物学者ガレット・ハーディンが1969年(昭和44)に書いた『コモンズの悲劇(The Tragedy of the Commons)』がきっかけです。彼はイギリスの伝統的な土地利用形態であるコモンズ(共有地)を題材に、「共同で利用される資源は、遠からず荒廃していく」ことを「牧草地の悲劇」という例えで説明しました。

仮に、ある限られた牧草地の中に、10頭ずつの羊を持っている4人の農夫が放牧をしていると仮定します。羊が牧草地にかける負荷は4人が均等に負担しています。しかし、ずるい人間が1人いて、

どんどん自分の羊を増やしたとします。その人間が1頭増やすと、その利益は増やした人間のものとなる。一方、1頭増やしたために土地にかかる負担は4人で負担しなければならぬ。そこで、残りの3人も単純に損しないように1頭ずつ増やしていくと、最終的にこの牧草地は滅ぶというものです。

この話のミソは、自分からこのゲームをやめられないということ。なぜなら、羊を誰かが増やすと自分が損してしまうため、増やし続けねばならないという悪循環に陥ります。この牧草地で起きるジレンマ状況を、ハーディンは地球にあてはめて説明したのです。

その根本にあったのは、地球規模の問題です。地球全体の中の資源を維持するためには、どのように利用したらいいのか、どのようにしたら地球に負担をかけないか。こういう大きな問題を説明するために、イギリスのちよつとした小さな事例を扱ったのです。

ハーディンはコモンズの世界を、みんながただ乗りをするフリーライダーの世界と捉え、管理が存在しないと考えた。しかし、現実を見るとそうではなく、共同で管理されているコモンズにもさまざまな管理形態や使用形態などのシステム、ある種のコントロール・メカニズムが存在する。そして、その

ような管理システムが資源の持続可能性を保つのに役立つだろう、と一般の人々も期待したのです。

私は「資源利用が特定集団に限定され、その集団によって決められたある規則に則って管理され利用される共的資源、それらが存在する空間」、これをコモンズと考えています。

とは言いながらも、現在、コモンズに関して、二つの意味があまり区別されずに使われているように思えます。

一つは、共同で使う可能性を持つ「資源そのもの」(Common Pool Resources)です。文字どおり、海、川、森林など、資源そのものを指します。

もう一つの意味は、「共同所有の資源」(Communal Property Resources)で、資源とそれを取り巻くシステムの両方を表します。どちらも、よくCPRと略され、文脈によって使い分けされたり、区別せずに使われています。

「共同所有の資源」という後者の言葉を使うときは、どのように人々が共同して資源を利用し、共同で分配、維持管理しているかというシステムに目が向きます。今回も、ただコモンズというときは、こちらの意味で使います。

一方、前者には、そのようなシステムの意味はありません。みんな

ながアクセスしたい資源そのものです。ですから、一人で独占することも、国が独占することも、また、みんなで使うことも可能です。この言葉には、資源をどう所有し利用するかという意味は本来は含まれていないのです。

例えば、アワビの例で考えてみましょう。アワビそのものは単に前者の「資源そのもの」です。

しかし、アワビの生息数が常に一定以上になるようにするには、再生可能な漁獲数を超えて乱獲しないようにしなくてはなりません。そのために、漁場が設定され、漁場で操業する権利つまり利用権が設定されて、それを組合などが管理します。さらに、操業制限が行なわれたり、誰かが密漁をしないように監視し、それを破ると相應の制裁措置が取られたりしなくてはなりません。こうなると、アワビそのもの、アワビが捕れる漁場利用権、管理組織、これらを含めて「共同所有の資源」と呼ぶことができます。

資源といつても

いろいろある

今コモンズの話をしました。そこで人々が何を資源として見るとかというのは重要なことです。一口に「川が資源である」と言っ

も、川全体が資源なのか、川の水が資源なのか、魚が資源なのか、いろいろな見方ができます。

そこで、こうした資源を「資源素」と、「資源素」が複合して存在する場としての「資源系」に区別するとわかりやすいと思うのです。先程挙げたように、川一つとっても「水」そのものや「魚」、さらには「発電源」、「航路」、「飲料水の供給源」としての川など、人が川に見出している資源の要素はさまざまです。このように「資源素」とは、人がそれぞれに資源として見出している「要素」を指しています。

一方、川、海、山などは実体としてあり、かつ、いろいろな資源素を内包しています。そこで、さまざまな資源素を内包しているような資源の総体を「資源系」と呼ぶことができます。その資源系の中に、多様な利用価値を持った資源素を、人が見つけ出すと考えるとよいわけです。

このようにとらえると、例えば、資源系のレベルでは同じ「川を守る」と言っている、資源素のレベルまで下りると、あちらを立てればこちらが立たずになることも多い、ということがわかってきます。川にダムをつくり水資源を確保することは、川という資源系を持っている「水資源」という資源

素を大きくしますが、そうすると魚が上流に上らなくなるといいうに、別の資源素が衰退する場合がありますからです。

同じ川でも、このような資源素の組み合わせがいろいろあり、どが大切かは状況によって変わるということだと思います。人々はそれぞれの地域で、それぞれの資源を見出しており、それぞれの利用法があり、その利用法を取り巻く背景に人間関係がついてくる。この連鎖関係を見ないと、なぜ住民同士あるいは住民と行政の摩擦などが発生するのかわからないし、それがわかれば対処の方法も考えられるようになるはずだと思います。

資源素、資源系、地域の条件、それを取り巻く人間関係、場所により異なるこれらの連鎖をきちんととらえないと、コモンズの話も始まりません。

コド漁

私は、新潟県岩船郡の大川という川に、20年前から通っています。ここでは、コド漁という古いサケ漁が行なわれてきました。

サケ漁は、それにかかわる中で、いろいろな人間関係をつくったり、川を保全するという機能を持っています。いわば、利用しながら守っている例です。しかし、漁師が

「川をきれいにしよう」と考えているわけではなく、サケ漁をすることがサケが上ってくる環境をつくることにつながり、環境保全と一致します。自然環境と関係を持ちながら利用するという行為をとおして、生活の中に実益を取り込んで環境を維持、保全する方法があることを予感させます。

ここで自然と人の関係を判断する基準として私が参考にしてきているのが、前代から伝わってきているコモンズの「伝統」です。コモンズは、長い間そこに住んでいる人が、必要に応じて資源を利用してきた歴史の安定した到達点だからです。安定しないと、利用すべき資源はすでに消えてしまっているはずなんです。ある程度資源量が確保されて続けているという歴史的背景があるということは、社会の中で安定したポジションを得た、つまりその時代状況にあつてはうまくいっているという一つの証明になりうる、と私は考えています。

コド漁というのは、コドという仕掛けの上で2、3時間じっと待ち、漁具で引っかける、非常に効率が悪い漁です。なぜ、こんなに効率の悪いことをするのかが問題です。現に、大半の河川ではこのような漁法は継承されていません。

実は、250年前、大川沿岸の



上：コド漁
下：大川
(写真提供：菅豊)

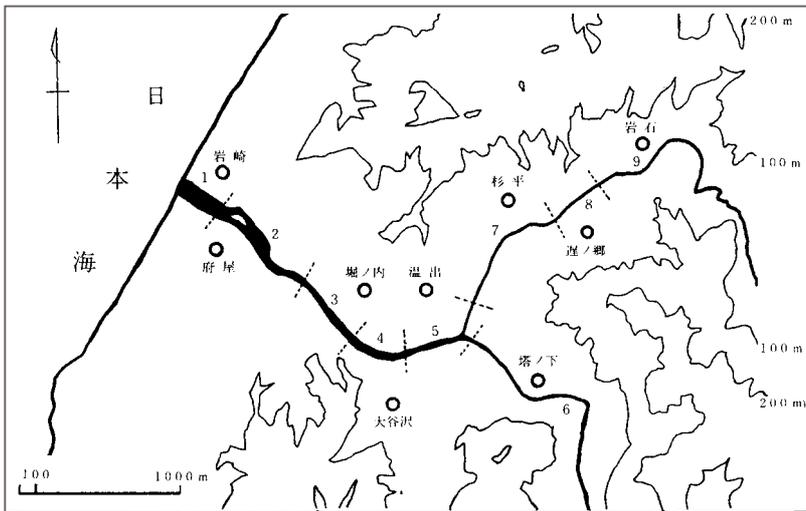


隣同士のムラで漁場争いがあり、塚を築いて境界を守るといふことで落ち着いた事件がありました。また1872年(明治5)にも、隣村との揉め事が再燃しています。さらに「川はムラのもの」では済まず、「大川流域全体の共有の空間」として認識されることもありました。1796年(寛政8)に上流の集落が連合して、下流の集落で行なった流し網漁の差し止めを要求しました。流し網でサケを根こそぎ捕まえてしまうためにサケが上流に上つてこない。そこで上流が一致団結して直談判をしたの

です。流し網のほうがコド漁よりずっと効率的ですが、明治維新の時点では消えています。コド漁が残った理由は、多分上流側の言い分が認められたからでしょう。近世の津軽石川(現・岩手県宮古市)などでは、サケが藩の重要な投資対象になりました。すると商業資本が入り、支配者の論理からサケ漁の権限をムラから取り上げて独占してしまいました。それに比べると大川が幸運だったのは、江戸時代に支配者が頻繁に変わり、統一的な川管理の政策ができなかった点にあります。さらに、大川は

要求しました。流し網でサケを根こそぎ捕まえてしまうためにサケが上流に上つてこない。そこで上流が一致団結して直談判をしたの

です。流し網のほうがコド漁よりずっと効率的ですが、明治維新の時点では消えています。コド漁が残った理由は、多分上流側の言い分が認められたからでしょう。近世の津軽石川(現・岩手県宮古市)などでは、サケが藩の重要な投資対象になりました。すると商業資本が入り、支配者の論理からサケ漁の権限をムラから取り上げて独占してしまいました。それに比べると大川が幸運だったのは、江戸時代に支配者が頻繁に変わり、統一的な川管理の政策ができなかった点にあります。さらに、大川は



大川の漁場区

- | | | | | | |
|----------|-----|----------|-----|----------|-----|
| 1. 第1漁場区 | 岩崎 | 4. 第4漁場区 | 大谷沢 | 7. 第7漁場区 | 杉平 |
| 2. 第2漁場区 | 府屋 | 5. 第5漁場区 | 温出 | 8. 第8漁場区 | 遅ノ郷 |
| 3. 第3漁場区 | 堀ノ内 | 6. 第6漁場区 | 塔ノ下 | 9. 第9漁場区 | 岩石 |

ムラごとに大きく分けられた大川の漁場区(上)は、ムラの中で各個人に割り当てられるために「場所」割り(右)がされている。右図は「じいちゃん」の住むムラの例。



大川の河原に広がる河原畑。自分で食べたいものをつくる。(写真・図表提供: 菅豊)

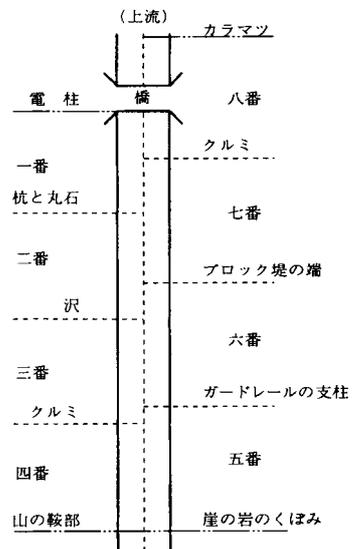
下: 川分けの入札状況。表頭の1-8の番号が「場所」割り図の1-8に対応している。

1984年度の入札状況

(単位: 円)

入札参加者	1番	2番	3番	4番	5番	6番	7番	8番	合計 入札額	平均 入札額
じいちゃん	15,000	10,000	75,000	100,000	14,000	*86,000	25,000	*85,000	410,000	51,250
A	20,000	51,000	*105,700	*128,000	10,000	42,500	10,000	35,000	402,200	50,275
B	20,000	*76,000	30,000	105,000	20,000	80,000	*25,000	30,000	386,000	48,250
C	20,000	44,000	60,000	80,000	*56,000	68,000	10,000	43,000	381,000	47,625
D	*35,000	30,000	73,000	102,000	30,000	60,000	10,000	35,000	375,000	46,875
E	25,000	35,000	55,000	75,000	18,000	45,000	19,000	55,000	327,000	40,875

注 *印がついているのが落札者



「川分け」 コモンズのオークション

越後の一番北で、消費地からも遠かった。このような条件が重なって、コド漁が残ったと考えられますが、単純に「残った」のではなく「残された」と考えるべきなのです。

サケ川というのは、川でサケを捕る権利と場所を意味します。そのサケ川の権限はムラに帰属しますから、ムラごとに漁場区に川を分けています。その川の漁場区をさらに個人の場所に分けるのです。

昔は、ムラのいろいろな義務を履行する人が、サケ川漁業に加入できると定められていました。村の総会と自治会費を納める寄り合いが年2回行なわれ、その内の1回の席上「川分け」という入札をします。場所の数以上に組合員がいたという具合ですから、希望者全員には当たりませんでした。それぞれの場合に値段をつけ、一番高い値をつけた人が落札します。

1984年(昭和59)の入札を見ると(上図)、6名の参加がありま
す。*印のついている人が落札者
私が世話になった「じいちゃん」
は6番と8番が好きなんです。それと、各人の付け値の平均額を見ると、「じいちゃん」が一番サ

ケ漁に熱心だということがわかります。

コド漁は200年以上も続き、各場所でも毎年どれくらい捕れるかは、みんな何十年もやっているの
でわかっています。好きな場所も
決まってきた、それを他の人間も
わかっている。「じいちゃんはこ
こを狙ってくる」ということがあ
る程度わかっているの、取
競争はしません。そのように暗黙
の了解で、値段や場所が決まっ
てくるのです。

みんなが「ここは捕れる」と思
っている場所は、12万8000円
で落札された4番だということも
わかります。相場は10万円前後で
すから、どうしてもそこを使いた
い人は、相場に多少上乗せをしな
くてはなりません。入札で得られ
た金は古くはムラで管理し、祭り
の費用になったり、全戸に平等に
分配したりしています。川の収益
も、公的な資源として重要だった
のです。

また「差し引き」という仕組み
があります。入札を開封する前に、
1度だけ値段を変えるチャンスと
か、5000円引くとかいいま
す。これをオープンにして決着し
ます。サケを捕るだけではなく、
入札自体の楽しみがあるのです。
人と自然のつき合いの中には、獲

物が捕れたという結果だけではなく、システムが楽しいという側面がありますね。

川分けの入札のときには、必ず隣のムラの者が立ち会って境界を確認します。入札する前にみんなで川を見るわけです。杭は打たずに、棒を持って右だ左だと言う。1年経てば川は変わりますから、「今年は、この場所は悪いなあ」と言う者も現れます。実は、つぶやいた本人はそこが欲しい。既に駆け引きが始まっているわけです。

人間関係とサケ漁は互いに影響し合う関係

このサケ漁のベースには、ムラ社会のつきあいがあります。コモンズを支える人間関係がないと、コモンズは維持されません。しかし一方では、サケ漁が人間関係をつくる側面もあります。サケ漁が人間関係をつくり、相補い合う関係が存在するのです。つまり、川をコモンズとして利用したり川を守るという行為は、川にかかわることでコミュニティをつくる効果が期待できるわけです。

の情報も伝わります。例えば「下流で昨日甚兵衛が取り損ねたのはすごい大物だったぞ」という話が上流に伝わり、「あれは橋の所で与作が捕った」というような話が伝わってくる。誰かが捕り損ねたサケを捕るのも、日頃のつき合いで情報を共有する間柄から生まれる名誉なのです。一見、「サケが捕れてうれしい」と見えることも、実はもつと複雑で、いろいろな楽しみが込められているのです。だから、彼らはコド漁を捨てないという、一方、そういう論理は、行政側ではなかなか理解できません。大川では、女性が河原で畑をつくっています。砂地の小さな畑は、家庭菜園のようです。特に中流域は河原が広いので、モザイク状に広がっています。こういう所に、伝統的な作物が残ります。豆でも、古い、自分の所でしか使わないような、商売にならないものを植える。自分で食べたいものをつくるわけです。赤カブもつくります。もう稼ぐ必要のないという人は、自分の所有する畑は放っておいて河原畑で食べるくらいのもをつくる。

昔は、無所有層が河原を開拓して、自分たちの日常必要なものをつくっていたことは、間違いないでしょうね。河原の持つ、弱者救済機能です。今は、別の場所に広い畑を持つている人でも、河原畑に通ってくる例もあるようです。河原に行けば、他のおばあさんと会えますからね。河原畑にははっきりとした社会システムがあるわけではないのですが、不文律の人間関係がある。

意図せざる結果を

もたらすシステム

川には、「俺たちの川」という村ごとの小さなコミュニティでとらえられたコモンズの意識と、大きな流域から見たコモンズという意識が二重に存在します。また、それらを運用するシステムも重層しています。さらに落札して得た「川のこの場所は俺のものだ」という個の意識もある。こうした感覚が、川の所有意識の萌芽なのです。

彼らが、ここに来て釣りをする都会人と明らかに違うのは、彼らがここで歴史と、その歴史の背景に存在する社会システムを背負っているからです。彼らは、自分たちの社会システムをちゃんと持っているんです。そういう社会システムが結果として、川の保全につながっています。彼らは本当に川に敏感で、ちょっとでも水が濁っていると自転車を漕いで、みんなで上流に上がっていく。するとトラックを洗っている人がいた、という例もあります。「何で俺たちに言わないで、上流で工事するんだ」と役場に駆け込んだりすることもある。彼らを自然の管理者と見る必要はないけれど、明らかに本人たちの意図とは別に、管理者の役割は果たしています。

大川も後継者がいなくなり、入札をやめた所もあります。入札をやめてみんなで平等に管理を負擔するという方向にいった所もあります。コモンズを維持するための条件としては、参加者の人数や資源量、経済性などがあります。そういうものがびったり合わないコモンズは維持できません。それらが変化していく中では、コモンズを維持する仕組みも変わらざるを得ないのは当然です。

いま、世界で盛んに議論されているのは、多様な成員とコモンズを維持するにはどうしたらいいかという問題です。日本は、海外に比べると均質な社会と思われがちですが、実はそうではない。さまざまな異なる社会階層、経済階層の人々、すなわち、価値観が大きく異なった人々が、同じ空間の資源にアクセスするのが普通のことになっています。これをどう調整するかが、大きな問題となります。

都市の中に里川を拡張していいかと考えたときに問題となるのは、多様な人が多様な価値観を持っているため、一つの価値観でまとめきれないということです。すると、お互いの信頼関係が築けないし、信頼できない人をしる規則もつくりづらくなります。裏返していえば、川を維持するためには、そのような社会的紐帯が不可欠ということ。都市の川をコモンズにする戦略

昨年4月に、「河川敷に不法菜園」と見出しのついた新聞記事を目にしました。東京都江戸川区、新中川での話です。河川敷を菜園として利用している人たちがいる。その人たちに河川管理事務所が立ち退き命令を出し、最終的には強制撤去しました。大川の河原畑ではうまくいったものが、都市ではうまく機能しないわけです。

この事件は象徴的で、私はこの事件についての意見をまとめてみました。

行政側への意見としては、「管理」を狭くとらえているというのが私の印象です。河川敷に管理事務所は「防災の観点から危険であるからアクセスするな」と言う。この考え方が狭い。問題は構築物



ですが、構築物をつくることと菜園化することは、別の次元の問題です。それを分けて考えるべきなのです。

というのも、河川敷の菜園利用を排除するのではなく、適切な利用システムを積極的につくり上げるほうが有益と考えるからです。第一に、限られた都市空間の有効利用ができます。スペースがない所で菜園を作りたいという市民の思いに応えることができます。第二に、河川敷を利用することで環境保全ができる。菜園は、菜園づくりを行わない地元住民からは「景観が悪い」「環境を荒らしている」と否定的に受け止められています。それが河川管理事務所の言い分の裏づけにもなっているのですが、それは問題の所在が違うのではないのでしょうか。野放図な利用や、菜園化した結果を引き受けようとする無責任な利用が問題なのであって、菜園化そのものが問題なのではないということです。管理システムの不在が問題なのであって、菜園化そのものは、河原にゴミを放置するようなものとは違います。適正なシステムがあれば、不法投棄などをやめさせるといった「有益な違法行為」になりうるのではないかと。菜園化することで、河川敷で菜園をつくる人は、ある種の河川敷の管理者として、

河川事務所の仕事の一部を担ってくれる。少なくとも、責任ある利用者育てることが大事なのです。無責任な菜園利用者がいくら増えても、環境保全につながりません。河川を守るという責任ある人々を育てることは、河川の保全につながります。そうした人々を育成するのは、菜園は効果的だろうと考えました。第三に、菜園によって新しい人間関係をつくり出すことができます。このような菜園を維持する過程では、菜園づくりを行なう人が組織をつくり、一定のルールが生まれるでしょう。

ムラにはそのようなルールが既にあり、都市ではこれからつくらねばならない。その方法は対話です。そういう組織ができれば、河川敷の適切な管理がその人たちによって行なわれるはずで、

ですから私は、ここを単純に菜園として開放しろとは言いません。年間使用料いくらで、この区画を使いなさいというだけでは、だめなのです。組織的に河川のゴミを拾うとか、さまざまな管理行為にかかり、義務を負う。勝手気ままに振る舞うフリーライダーは排除しなくてはなりません。

このような組織は、人間関係の希薄な都市社会に、新しい人間関係を形成するだろうと思います。川を守るための組織は、何もない

都市でも、川にかかわる人間関係を生み出すでしょう。つまり、「人間関係を形成するために川を使いましょう」という仕組みを構築しなくてはなりません。そういう意味では、菜園づくりが単なるお金で面倒な負担を避けるような行為であってはダメなのです。

人々の関係が生む「里川」

組織やルールというのは、つくるよりも維持して守らせるのに骨が折れます。組織やルールが上から押しつけられたものであれば、

それを守ることは大変難しいことでしょう。しかしコモンズを維持している集団が、長い時間をかけて培われたルールを守ることが、成員に納得して受け入れられたことに違いありません。実際、大川のコド漁に携わる人々には、守らないなどということは、考えたこともないという意識があります。それと、正当性も大事ですね。これも時代と地域によって違うのですが、現代の社会で、平等や公正から逸脱するものはコモンズとして成立しません。それぞれの社会で認められる正当性を持たなくてはなりません。

また、基本的な信頼関係がある社会は発展しやすいという考え方があります。そのような信頼関係

を生む人々のネットワークを「社会関係資本」(Social Capital)と呼びます。ただ人が集まっても、信頼関係は生まれません。逆説的ですが、人間関係を網の目のようにつくりたいかなくては信頼関係は生まれません。例えば菜園をとおして人間関係ができると、いつの間にかそれを越えたコミュニティがいくつもできていくでしょう。それが社会関係資本となっていくのだらうと私は思います。いわば、コミュニティの再生です。そのため川は資源として注目すべき存在です。

湾処わんこと呼ばれる川の淀みや淵を人工的につくっても守る人がいなくて、川はきれいになりません。目に見えないネットワークが背後にあることが大事なのです。河原のグラウンドで野球をしている人々も、ただ「野球をしている」ではなく、「河川敷を利用している」という意識が大事ですね。自分たちが資源として見ているものを、どんどん特化していくと、資源系全体としての川が見えなくながちです。そうではなくて、この川がなければ自分と社会とのかわりがなくなってしまう、という意識の持てる川。これが里川なのでしようね。



現代都市の

「里という居住地」とは

みんなが共有感を持つまちを持続させる谷根千の人づきあい



森まゆみ

もりまゆみ

作家

地域雑誌『谷中・根津・千駄木』編集人
東京都文京区生まれ。早稲田大学卒業。1984年に地域雑誌『谷中・根津・千駄木』（愛称「谷根千」）を創刊。雑誌を続けながら、作家活動とまちづくりを展開。主な著書に『即興詩人のイタリヤ』（講談社2003）、『森の四手井綱英の九十年』（晶文社2001）、『取り戻そう東京の水と池』（岩波書店1990）、『谷根千の冒険』（現在ちくま書房2002）ほか（写真左）

陣内秀信

じんないひでのぶ

法政大学教授

1947年福岡県生まれ。1980年東京大学大学院工学系研究科博士課程単位取得退学。主な著書に『水辺から都市を読む』（法政大学出版局2002）、『イスラム世界の都市空間』（共著、前同2002）、『シチリア南の再発見』（淡交社2002）、『東京の空間人類学』（筑摩書房1985）ほか（写真右）

東京・上野の北に広がる「谷中・根津・千駄木」地域、通称「谷根千」は、かつて流れていた藍染川の周りに広がった都市の記憶が残る場所です。この地で、地域雑誌『谷根千』を20年余りにわたり発行し続けている森まゆみさんと、東京の探検と解説を続けてきた陣内秀信さんにお話をうかがいました。

「都市再生」という言葉をよく目にしますが、『谷根千』という地域雑誌が20年もの長きにわたって続いてきた背景に、居住地の歴史や川とのかかわり、「都市の暮らしを守り、持続させる働き」を見出すことができます。



『谷根千』創刊のころ

——森さんたちが地域雑誌『谷根千』を創刊されたのが1984年（昭和59）。日本がバブルに入るちよつと前のことですね。

森 始めたころ、「今までこの地域は話題がなくて困っていたけれど、良いものが出た」と、新聞記者がよく取り上げてくれたんですよ。都内版に大きく「主婦たちが

地域雑誌を発刊」と出してくれたこともあります。

陣内 江戸東京ブームが85〜86年からですね。その前に『谷根千』が創刊され、ブームに弾みがついたんですよ。

本当に冒険的なことだったですね。というのは、地域の雑誌というのは、それまでも銀座や日本橋、深川、上野などにありました。けれど、それは商店街で発行していた、スポンサーと結びついた形でお店や町の紹介をしているものでした。経済的にきちんとした後ろ盾があつて成り立っているタウン誌です。でも、森さんたちは地域を丸ごと理解していたし、志したものが全然違う。そういう意味では初めての試みですよ。

森 今思うと、「よくこんなことやったな」と思います、お金もないのに。今でいう、起業家みたいなものでしょうからね。

陣内 どこからそんなにエネルギーが出たのかなあ。

森 ほかにできることがなかったから。子供が生まれて、子育てのために地域に帰ってきたわけでしょう。地域で子育てしながらできることをみんなで考えて、出てきたものがこれだったんです。

陣内 確かに、小さなお子さんを抱えていらつしやう。自転車に乗せて、よく取材に回っていましたね。

森 最初は3人のメンバーに4人

の子供がいた。それが今、10人にまで増えました。お互いに面倒を見合ったり、研究仲間の学生さんにも、子育てまでお世話になりました。

飲み屋さんには雑誌を置いてもらうようお願いしたら「あんたら、仲間に来てくれるんなら置いてもいいよ」って言われたこともあるんです。しょうがないからね、資金稼ぎも兼ねて交代で、週2日ずつ、飲み屋にアルバイトに行きましたよ。でも今考えてみると、よく旦那たちが許してくれたよねえ。地域雑誌発行するために、妻は週2回飲み屋で働いていたなんて。赤ん坊も、うじゃうじゃいるのに。

陣内 でも、森さんたちが耕してくれた、本当に貴重な地域の情報



や記憶がどんどん出版されていくのを見てね、あれだけ日本は情報化社会といわれていたのに、今まで自分たちが見ていた情報というのは何だったのだろうと思った。確かに、区史のようなオースドックな歴史の編纂はあったけれど、あまり生き生きとした感じではなかったから。ああいうものは、地元の人に取材したりヒヤリングしたりしたわけではないでしようし、そういうみんなの財産として眠っていた地域の情報を、情報化時代といながら、それまで誰も扱っていなかったことが、森さんたちのお蔭でわかったんです。

森 郷土史家の方たちも、いつも大変ですよ。自費で史料を買って研究しても発表の場もなくて。取材に行くと、ガリ版刷りのものを見せられたりしました。でも行政はいばっていてね、「そんな素人のやるものは」と言われて、本当に苦労されていました。根津、根岸、日暮里にも郷土史研究会があり、最初はそういうところで話をうかがってね。

谷中・根津・千駄木 の魅力

陣内 谷根千という地域は、多様な地域性が重なっていて、面白い。

みんな、この辺りを簡単に「下町」と括ってしまうけれど、歩いてみればわかるように坂が上がった所にも広がっていて、下町ではない。谷根千には本当にいろいろなものが集まっていて、東京の縮図のような面があると思います。

森 不思議な所ですね。本郷台地の上に並ぶ武家屋敷と寛永寺から続く寺が、この地域を性格づけたのだと思います。それで谷底には根津の町人地、遊廓もあった。

陣内 この辺は、山の手の北のほうにあたります。同じ山の手でも、南の港区の辺りとは違いますよね。



歴史が沈潜していたり、文学的であったり、大学があったり。

森 それが大きいですね。近代になると上野に美術館、博物館ができ、東京美術学校や音楽学校（今の東京芸大）ができる。本郷のほうには東京大学がまとまってできた。両方に囲まれて、この辺りの

近代の性格が決まるんです。

陣内 谷中辺りで地域活動している人たちには、芸大出身の建築の若い人が多い。それに外国の人が地域の魅力に惹かれて来たり、住み着いたりします。

森 明治のころは大学の先生も多かったようですね。ただ、だんだん東京が拡散して、今は大学の先生は中央線の沿線とかに…。

陣内 追い出されてしまいましたね。

森 私は大学生のときに朝倉彫塑館の館員になり谷中という町に本当に出会ったのですが、当時はまだまだ古い屋敷が残っていました。私が大学生のころと、『谷根千』を始めた29歳の間の10年間を比べても、相当変わってしまいました。100棟壊される中で、1、2棟どうにか残っているという印象です。バブルの時代に入ると、表通りにビルがどんどん建ち始めました。この辺りは井戸も多いのですが、路地の調査をしたときに、湧水で金魚を飼っているおじいさんに出会って、ほっとした覚えがあります。いずれ自分たちも住めなくなるのではと思っていたのに、まだまだコンクリートやアスファ

ルトを一枚むけば、自然が息づいている町なんだなあ、と。それがうれしかったのを覚えています。

—— 陣内さんは、84年当時、既に谷根千には注目されていましたか？

陣内 私にとつて、東京の中で興味を惹かれる場所がいくつかありますが、その内の一つです。谷中や、根津神社は大好きな場所でしたし、実は今日、谷根千工房のすぐ近くにある須藤公園とも、久しぶりに再会しました。最初に来たのは、80年代の初め。公園で子供たちが遊んでいるのを見て、良い場所だなあと思いました。この辺りの高台は近代になって基盤目状に開発されたのですが、元は大名屋敷だったんですよ。

森 そうです。松平飛騨守の屋敷ですね。

陣内 当時は、現在の2500分の1の地図に、江戸時代の切絵図情報を書き込んで、路上を探索しました。あれはね、自分たちで重なるかどうか確かめながら歩く、肉体化されて面白いですよ。感激も大きい。それをつくって、片っ端から歩き回っていたんです。



道という流れも使い方次第。その空間に魅力を持たせて賑わう谷中銀座。

森 根岸のことを調査された結果が、『東京の町を読む―下谷・根岸の歴史的生活環境』（共著/相模書房1981）という本になっていましたよね。私は「自分の家の近くのことを書いてある。じゃあ、この方のごとくに相談に行っちゃおう」と、仲間と二人、ぶっつけ本番で陣内さんにお会いして、アドバイスをいただきました。

陣内 私はもともと下谷根岸を調べていたんです。あそこは関東大震災の影響も受けていないから建物が全部残っているし、下町でわかりやすい。ただ、東京に受け継がれている魅力というのは

それだけではない。もつと普遍的に描ける場所がないかと思ひ、麻布や三田から根津、千駄木辺りまでの山の手を歩き始めたんです。歩いてみるとわかるのですが、東京には本当に「ひだ」があるんです。山や丘があり、下って行って低地があり川があつて、また登って行くところと高い所に神社がある。里川でまとまった地域ができていて、そのような生活圏がたくさんある。それがいっぱい集まって、巨大東京ができて上がっているのです。

昔、よく外国人が「東京は村の集合体だ」と言っていました。それは当たっていると思います。でも、多くの人は巨大都市東京のつべりと一つの塊ととらえてしまっている。歩いてみると、そういうことはわからないんです。特に顕著にわかるのがこの辺りです。

—— 住み手としての森さんは、それを聞いてどう思いますか。

森 『谷根千』を始める前の私は、ここが魅力ある場所とは思っていませんでした。よその地域がどんな近代化しビル化していくの、うちの地域はいつまでも汚く、すすけていて、古くさい。近代化していないと思っていた。けれど

結婚して子供が生まれ、子供と一緒に町をゆつくり歩くようになって、町もゆつくりと見ることができた。ゆつくり見るとね、「こんな所にお稲荷さんがある」とか、「天水桶がある」、「木の電柱がある」、そういうことに気づくわけ。そのうちに、「この町は震災で焼けていなかった」ということに気がついたんですよ。



最近の若い子は、こういう古い町を新鮮と感じるようです。自分たちが知らないからでしょうか。郊外住宅とか、共同アパートとかマンションというものが前提で、わりと白くてピカピカした家に住んできたから新鮮に映るのでしょうか。こういう町の古い家の陰影とか、階段や長押、欄間を見て感激している子が多いですね。

根津には

藍染川が流れていた

—— 『谷根千』3号で早くも藍染川を特集されていますね。

森 『谷根千』を始めたときに、陣内さんに「ご相談すると「単に建築史だけではなく、生活史、つまり、着るものや食べるものとかもやったら」と、良いアドバイスをいただいた。そこで、そういうことを地元の方にいろいろ聞き始めると、藍染川という名前を皆さんがよくおっしゃるんです。関東大震災後に暗渠になりましたけれど、昔はあつた川のことを、本当に皆さん懐かしく話される。郷土史研究会のお年寄りの話の中でも、必ず藍染川の話が出てきました。それを聞いて「川は町を貫くものなんだな」と思いました。誰にとつても、何か思い出がある。川沿いにリボン工場があつて、川の色が黄色に染まったり赤に染まったりすることで、そのときにつくっているリボンの色がわかるとか。赤ちゃんが死んで流されてきた、という話が出ると、「あ、それ覚えてる、あれはかわいそうだったよね」とおぼあさん同士で話が弾んだりする。そこでトンボを捕ったとか、ツバメを追いかけたとか、川にまつわるいろんな話が出てきます。「震災のときに川を渡って逃げた記憶があるから、あのときまではあつた」とかね。そういう個々の人の心の中にある藍染川を調べようと思ったのです。

でも当時は、やり方がまったく

わからないでしょう。だから、『谷根千』仲間の山崎と二人で、藍染川沿いの家を一軒一軒訪ねて、「藍染川が流れていたときのことを知りませんか」と聞いて歩いたの。そういう幼児の砂いじりのようなやり方で調べていました。今、あんな悠長なことはとてもできません。

—— でもそのお蔭で、細大漏らさず聞き取りができた。

森 そういうことです。暇だったんです。まだ部数も少ないし、他に仕事もないし。だから「今日はここからここまで聞いて歩こう」と地道にやっていたんです。

—— そのとき、森さんは藍染川の名をご存じでしたか。

森 いいえ、知りませんでした。ただ、よく話に出てくるので、何かと思っていたいました。上流に行くくと谷田川というし、下流に行くくと忍川と呼ばれる。他にも「しみみ川」、「境川」と、いろいろな名前があるとおっしゃっていましたね。この川は、上野の山と本郷の山の両方から絞り込まれた地下水が集って低地へと流れている。石神井川の本流だという説もあります。

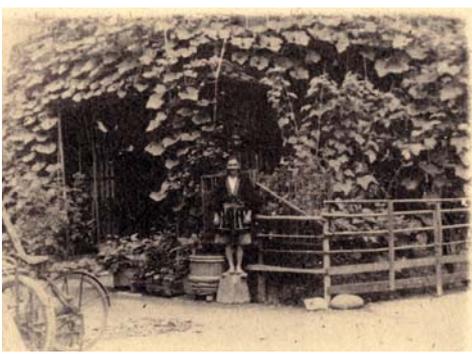


庭木の葉っぱが詰まってあふれたんだ」と言うんです。

——聞き取りと一緒に、写真などの史料もたくさん集まったようですね。

森 この写真(下)は不忍の池。日清戦争の時の清の軍艦「鎮遠」の錨と巨弾10個が置いてある。こんな写真を見つけると、びっくりします。話には聞いていたけれど、実物はこれだったとは。明治時代のアマチュア写真なのです。お宅に古い写真はありますか、と言って集めると、こんな意外な宝物が出てきたりします。

私の一番好きな写真は、戦時中の食糧難の時代に、庭がないので家に蔓を這わせてかぼちゃを育てている写真です(左)。



面白いでしょ。今で言ったら、壁



面緑化。

陣内 確か永井荷風の『日和下駄』の中で、「芝の櫻川、根津の藍染川、麻布の古川、下谷の忍川の如き其の名のみ美しき溝渠、もしくは下水」とありましたね。

森 藍染川という名の川は他に神田など3流あったようですね。荷風は東京、ことに下町をよく歩いています。

日和下駄…大正4年、荷風が36歳のときに刊行された東京散策記。この中で、「東京の水を論ずるに当たってまず此を区別して見るに第一は品川の海灣、第二は隅田川中川六郷川の如き天然の河流、第三は小石川の江戸川神田の神田川、王子の音無川の如き細流、第四は本所深川日本橋京橋、下谷浅草等市中繁華の町に通ずる純然たる運河、第五は芝の櫻川、根津の藍染川、麻布の古川、下谷の忍川の如き其の名のみ美しき溝渠、もしくは下水第六は江戸城を取巻く幾重の濠、第七は不忍池、角筈十二社(つのはすじゅうにそ)の如き池である。井戸は江戸時代にあつては三宅坂側の桜ヶ井、清水谷の柳の井、湯島の天神の御福の井の如き、古来江戸名所の中に数えられたものが多かったが、東京になつてから全く世人に忘れられ所在の地さえ大抵は不明となつた」とある。

森 この辺りには藍染川だけでは

なく、川に注ぐドブが何本もありました。高台にも地下水が豊富に出るため、井戸がたくさんあります。団子坂や弥生坂でも、道の脇を水が流れていたらしいですね。何本もの溝が交差して橋がかかり、その溝に「大どぶ」とか「5人堀」とか名前がついていた。本当に水の豊かな地域だったんです。

陣内 こんなに水路がいっぱいある町は、珍しいと思いますよ。

森 現在は蓋をしたため川が見えなくなっていますが、最終的には不忍池まで流れて、そこでようやく水が見えます。蓋をしたのは震災後です。よくあふれたので、この辺の有力者が集まり役所にかけてあいに行つたということです。

陣内 染物屋の丁子屋さん。今でも明治の建物が残っているんですね。

この写真(右)がかつての藍染川です。「田端の大根」というのが有名で、昔はこのような農家があったところ。1902〜1903年(明治35〜36)ころの田んぼで、橋の手前に野菜の洗い場が見えます。もつと下流の根津の辺りは、町家が建て込んだ商業地となつていった。

陣内 これは1915年(大正4)



に出水した時の写真ですね(左)。**森** ええ。土地の高低差があるので、上に住んでいる人と下に住んでいる人がいつも張り合っているんです。上に住んでいるのはホワイトカラーの人が多くて、下には町工場があったり職人さんが住んでいる。でもけつして差別とかコンプレックスとかではない、一種の意地とか対抗心だったりするところが面白い。例えば、雨が降ると昔はよく不忍通りに水があふれた。藍染川幹線が詰まるからで、ごく最近までの話です。すると下の人にお見舞い金が出たりする。上に住む人は面白くないから、「あんなもの出す必要はない」と言うし、下の人は「おまえの所の



かつての藍染川、よみせ通りに立つ三角屋根の建物。現在は製版会社が使っている。

森 染物屋は、川を利用していた仕事ですからね。紅絹工場や、リボン工場の三角屋根の工場の建物が今も残っています。

1888年(明治21)6月までは根津遊郭があり、そこにも川が流れていて、逢初橋という名の橋がかかっていた。明治のジャーナリストであった福地桜痴が名づけたのです。悪所に橋を渡って入る、というのは川を越えて異界に入る、という境界の感覚があった。今でも区の境界は、不忍通りではなく、これに平行した元の藍染川筋です。埋め立てた跡が商店街になっていて、そちらが区の境です。不忍通りは田んぼを埋め立てて、あとでつくった道にすぎませ

んから。元の藍染川を遡っていくと田端銀座を経て駒込銀座になり、商店街がつながっています。

まちづくりは

コモンズを守ることも

—— 最近、バブル崩壊で地価が下がった影響もあり、都心回帰の風潮があります。再び開発の危機にさらされる恐れに対して、守らねばならないという思いはあります。

森 もう20年近く、いろいろな保存運動をしていますから、私たちにとっては、誰が何をできるかはわかっているし、そのような人間関係もできているつもりです。すぐ「何々の会」をつくっちゃうし、実際にできてしまう。このような動きを行政も無視できなくなってきたためか、何か行動を起こすときには向こうのほうから相談してきます。昔なら、「根津なんてスラム・クリアランスして開発しよう」などと言いかねなかったのですから、地域活動をやってきた甲斐があるというものです。

例えば、昔は谷中墓地ではほとんど木を伐った。谷中墓地は私たちがとって地域の緑地であって、憩いの場であったり散歩したりする大事な所なのに、公園事務所に

とって利用者はお墓を持っている人だけなんです。ですから、お墓を持つている人から「木を伐つてくれ」と言われると、いとも簡単に伐つちゃうの。こういう木は「支障木」と呼ばれるんですよ。失礼な話ですね。木のほうが昔からあるのに、その脇にお墓を建てておいて、だんだん木の根が伸びてきてお墓が傾いたり、木陰で暗くてお墓に日が当たらない、痴漢が出る、などという理由で邪魔者扱いするなんて。最近では相談を受けるようになったので、ここをフィールドにしている自然観察会の人たちなどと、現場に見に行つて相談したりします。

最近では、日暮里富士見坂を守る活動もしました。本郷に建つマンションが、日暮里の富士見坂から見た富士山の眺望を遮つてしまふ。これを守ろうというものです。実際は建築基準法だけでは、拘束力がなかったので守れなかったのですが。

陣内 景観条例の中に、そういう軸になるような文言があればよかったですのだけれど。

森 建築基準法だけでは、どうしても防げないのです。遠くの山並みや、富士山を見る権利とか、これからはある程度考えていかないと

とならないのではないのでしょうか。例えば岡山の倉敷市では、山が見えなくなるマンション建設をやめさせるために、市が土地を買収したりしています。アンコールワットではその周りに変なものが建たないようにバッファゾーン(緩衝帯)を設けている。そういうことも考えないと。

このマンションは、日暮里富士見坂から2km離れた本郷通りにあるために、富士山を遮るといふようなことは建て主も知らなかった。それを私たちは、何階上げてほしい、下げた場合の損失を計算してほしいと言ったわけですからね。でも、それによってあの周辺の人たちは「自分の所にこういう計画があるけれど、富士山は大丈夫ですか」と気にするようになりましたね。

—— 2km離れた情報が、どのように地域の人に伝わるのですか。

森 伝わらないですよ。それが問題です。しかも日暮里は荒川区で途中は台東区、マンションが建つ本郷は文京区です。文京区が確認申請を出した後にわかりました。3区で富士見坂を守る会ができましたし、町会長や区の職員も入っています。これからは情報も通い合うようになったし、各区の景観

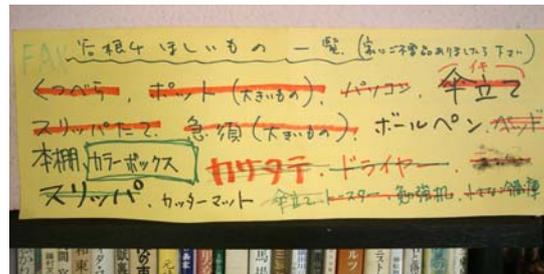
条例なども罰則規定や強制的な力はありませんが、眺望という言葉を入れてもらうようになりました。眺めというのはみんなの財産だということを定着させないとね。

—— そういう意味では、このよな人のネットワーク活動は大事ですね。

森 そうですね。行政区画にとらわれていては、動けませんからね。それから、「保存運動をどうしたらいいか」とか、「井戸を大事にして地下水を大事にするまちづくりをしたい」とか、そういう人たちがいろいろいらつしやいます。「雑誌をつくりたい」という方たちも来る。谷根千工房が相談センターのようになっています。現在は、相談と情報センターという不採算部門が大きくなっているんですよ。

陣内 普通は、古い建物に興味を持つ人、自然系の人などのように専門が分かれるんですけど、森さんのところは、オールラウンドだから頼りになる。専門化した人は、専門外のことにはまったくわからないから。行政も、そういう全体の有り様が大事ということをしつづつ理解してきたのでしょう。

森 あまりにもたくさんの方の活動に



町の commons として機能している谷根千工房のサロン。「ここには買ったものなど、ほとんどないの」と森さん。必要なものは、壁の貼紙に書き込んでおけばよいそうだ。

かわり、自分でも全体として何をしているのかわからなくなるときもありますが、私の中ではメリハリをつけて活動するようにしています。美術史などの研究会、映画を見る会、教育問題の会や、不登校の子が来ていることも。そういう活動の会合では、このスペースが使われています。酸性雨調査研究会、文京建物応援団とかいくつもの会の会合でこの場所を使っています。

—— ここが共有スペースなんですね。

森 そうです。町の commons といふのか。谷根千工房に来る途中に飲み屋が何軒もあり、それを門前飲み屋と称して、会合が終わるといつもそこに流れていく。そこへ行くといつも愛想良くしてもらえます。

サラつとした人間関係が持続する

—— 『谷根千』が、これまで続いた秘訣は何でしょうか。

森 何でしょう、みんなが支援してくれるからでしょうか。地域の人のレベルが高いですよ。

陣内さんが以前、「森さんたち

もすごいけど、こういうものを万人も読む人がいる地域もすごいね」とおっしゃった。受け止めてくれる人のレベルが高いということとは、事実でしょう。問題意識もあって、難しい話も嫌がらずに読んでいただけです。

地元の店にはほとんど置いていないので、自分がよく行く店には、置かないようにしてる。こちらは業者ですから、どこ行っても、「いつもいづも置いていたでいてありがとうございます」と言っていると疲れちゃって。ですから、編集者の方によく根津で飲みましよう、と誘われますが、私は「勘弁してよ、町では顔が割れているから。局地的に有名なんだから、別な所に連れてって」と断るときもあります。

『谷根千』を始めた動機は、そんな大それたものではない。ただ、どんな古いものが壊されていくし、古いことがちつとも記録されていないということに、忸怩たる思いがあった。同時に、自分たちは子供を持ったために地域に縛りつけられている。しょうがないから、子供を育てながら地域でできる仕事をつくっていくしかないな、と思って始めたのです。

それに夫の収入から趣味で雑誌

をつくって、夕夕で配るほど優雅ではなかったし。何とか仕事として成り立たせたかった。配達とか集金とかお金の計算とか、そういうことがあったからこそ、地域の中に根差すことができたのだと思います。逆に言うと、配達があるから300ものお店と知り合いになれたわけですし、そういうことが一番大事です。

陣内 森さんたちの活動に憧れて、「自分たちも」という人たちがたくさん出ましたよね。場所に力があるからみんな惹かれてやってきて、人間的な出会いが生まれました。伝統的なコミュニティだけでは終わらなかつた。谷中の面白いところは、お寺があつて、職人さんがいて、その後には芸大ができ、アーティストが来る。人の構造が、そのように二重にも三重にもあるのは、すごく魅力的なことでしょう。それと、60歳でも若者扱いでお年寄りの層が厚い。

森 町会でいうと、60歳は青年部ですよ。白髪でも。

陣内 年寄りがいばつていて、若い人も興味を持って集まり、住み込んでいます。そのような融合しているコミュニティで、小ぎれいなコミュニティではないですね。い

ろんな種類のネットワークを、森さんが全部つないでいったんですよ。

既存の面白いグループや組織はいっぱいあつたけれど、それはそれぞれ分かれて活動していた。あるいは狭い地域とか限られたジャンルで活動していた。その人たちは森さんの活動をとおして、見えてくるようになったのではないのでしょうか。いろんなネットワークがさらに大きなネットワークになつて、地域に網の目が急に広がつていった。そういう成功例は、あまり聞いたことがありません。

森 すれていない人が多いんです。ゆつたりとした人間関係も相変わらずです。みんな優しいですよ。ゆとりがあるんでしょうね。寺町だし、家作かまくらを持つている人も多い。あるいは寺の店子たなごで、あまりうるさく言われずに借家住まいを続ける人もいます。

この辺りの人は、子供が来ると「何かあげなきゃいけない」と思っていますね。私もちよつと訪ねると、「漬けもの食べてけ」「梅酒飲んでけ」とか。なんか、もう話ばかりですね。もらいものが多いですよ、この事務所の中にあるのも全部もらいもの。「今欲しいもの」なんて紙に書いて貼つてある。うちだけじゃなくて、ここ

に出入りする人みんなで、ぐるぐるたらい回すんです。

—— 仮に「谷根千」という言葉を知らずに今のお話だけをうかがうと、「それどここの田舎ですか？」と聞いてしまいますね。

森 そうですね。でも、今、個人の輪郭ははっきりしないし、家族の絆がばらばらで地域社会もなにとしたら、ものすごく不安定な社会でしょう。ですから、ここにはある程度死守したいと思っている。マンションに住んでいる人も、なぜかここに住むと馴染みまじ。お寺も琴や三味線の教室があれば、丹田呼吸法などもあり、写経もやっている。そういうのをうまく使いこなして、住む人との距離を近くしているんです。お祭りに行ったり、縁日に行ったり、求める人にはいろんなものがある場所、それが谷根千です。

—— そういう話を聞くと、一見田舎の人間関係が残っているように錯覚を覚えますね。

森 本当は、そういうことがうっとうしくて東京に出てきたはずなのに。都市の空気は自由にするってね。程良さが大事と違っています。集まって騒ぐ権利があれば、

行かないで放っておかれる権利もある。だから、そこらへんはサラッと風通しをよくしておきたい、という気持ちでいます。

陣内 例えば僕は杉並に住んでいますが、町会のお手伝いをしたりする中から、ある発見をしました。これは僕が住む地域だけではなく、ほとんどの所でも言えることと思うのですが、コミュニティに4種類あります。一つは商店街。そこは商業地が中心で、政治の世界ともつながっている。町会長が区議に立候補したりするのです。もう一つは氏子圏の神社。これは住宅地まで根を伸ばしています。それから、子育てとか学校とかのコミュニティ。それと目的別のコミュニティで、ジャズフェスティバルみたいな催しを通してつながる集団です。



実はこれらのものをうまく重ね合わせて育てれば、多様なことができるのではないかと思つたのです。ベタベタといつもくつき合っているだけが、能じゃない。谷根千の面白さは、いろいろな人がかかわっていても、サラツとしてるところにあると思います。

欧米から来た人もアジアの人も、国内のまちづくりの人も、ここに案内すると感激するんです。暮らしの中に自然と歴史が入っているというのが、独特な意味を持つのでしょうか。

欧米の人は東京というと、大きなビルのイメージを持っているので、ここに来るとそのイメージが覆されて驚くようです。しかも、人の顔が見えているから、ほっとしてくつろいで帰ります。プライベートとパブリックの空間が混じっていることも、彼らにすれば、有り得ない空間として新鮮に感じられるのです。

アジアの人は、「ここは実にうまく建て替わっている」と言いまます。古いものを残すだけではなく、変わり方が良いのです。中国から来た建築の先生が感心していましたが、路地が残り、空間の関係性が良いと言います。そういう意味で、これから変わっていくかざるを得ない都市にとって、一つのモデルになるはずはです。

それと、全国のまちづくり関係者から見ると、町並みの残り具合の程が良い。町並みを残しても生活空間が商売する空間になって、テーマパークみたいに変貌したケースも多いでしょう。ところが、ここは逆。声を大にして言うほどには残っていないけれど、程良く残っています。

だから、この谷根千の価値は世界的な視点で評価できるはずだけど、それを言葉で表そうとすると、結構難しいですよ。森さん、これからは、ぜひ外国にもアピールし

てください。

森 やつと子育てが一段落して、20年ぶりにパスポートを取って出かけてます。

『谷根千』を20年やってきて思うのは、仲間をしみじみと同志だということ。お互い動いて、子供を産んで、ということを見てきているしね。時間をともにすごしてきた「しみじみ感」がある。最初のころは私たちもおねえちゃん、町のおじいちゃんたちに人気もあった。でも、最近は日本女子大のゼミの若い子たちに、みんなの目がいつている。やっぱりエロスと聞書ききも、私はおじいさんは得意だけど、おばあさんは怖い。私が行つてだめでも、若い男の子を差し向けるとちゃんと聞いてきたり。

陣内 そういう意味で「元気にする」というのは大事なことです。僕もイタリアで調査しているときは、おばあちゃんたちにもてた。

森 でしょう。私だって、若いお兄ちゃんが一緒に活動してくれると元気が出ます。



生物多様性という水とのつきあい方

生きものと人が 川を合作する



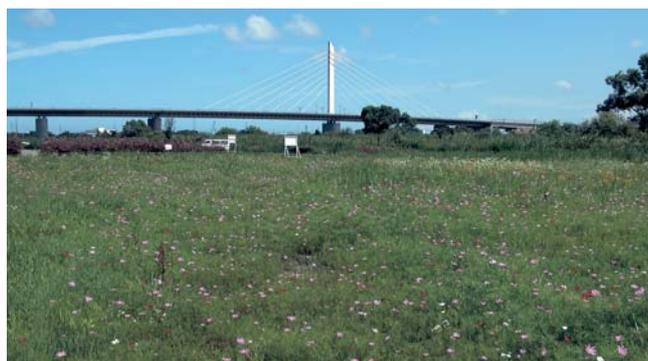
鷺谷いづみ わしたに いづみ

東京大学農学生命科学研究科教授
1950年生まれ。東京大学大学院理学系研究科修了。主な著書に『生物保全の生態学』（共立出版 1999）『サクラソウの目 保全生態学とは何か』（地人書館 1998）『里山の環境学』（編著 / 東京大学出版会 2001）ほか

詠まれた自然

水の恵みの多くは、生きものを介して成り立っています。現在はそのような意識がなくなってきましたが、川も生きものを媒介とした存在としてとらえることは当然のことと思います。

江戸という都市が成立したのは、氾濫原に当たる場所でした。江戸時代の書を見ると、季節になると川へ行き白魚をすくったり、花を摘んだりしている様子が描かれています。時代が下り、夏目漱石の『虞美人草』には「花見に行こう」と



「でも桜は終わったのでは？」と言うと、「荒川に行くのだ」と応じる記述があります。氾濫原的な要素を残している川の自然と、夏目漱石が記している植物がよく似ており、明治期まではこうした自然が残っていました。それが、徐々に都市の近くからなくなっていく。

現在では、日本人ならば常識として持っていた生きものへのイメージも薄れてしまっていると思います。和歌や俳句を見ても、日常で出会う生きものが詠み込まれ、感情や感覚を共有しながら和歌を鑑賞した時代から、自分の身の回

りにない異質な世界の詠句になってしまっていますね。高校生が俳句を論評しあう番組がありますが、それを見ているとかなり概念的なものが多い。自分の日常の生活、四季の自然というものは日本の文化の重要なテーマであったと思うのですが、それが薄れ、理屈を展開させているような俳句が優勢になってきているのかなと思います。

自然の価値が理解 されない文化の断絶

今の川を見ると、川の生きものと触れ合うことのできる場所がほとんどなくなっています。

川は、いろいろな形で利用されてきました。「川らしい」ということは、何も「川が原生自然である」ことを意味しているわけではありません。川の自然営力と、人がかつて川を利用してきた力、その合作ともいえるような自然が、最近まで川には残っていました。

江戸時代の新田開発期に、草や菅を刈ったり、肥料にするために、生草を刈ったりという行為で、人々が川面の資源を利用し始めました。その行為が川の氾濫に代わる攪乱を与え、広い胚配圏でなければ確保できない、多様性の高い水辺や葦などを存続させることに

なりました。そういうものの価値が残念ながら理解されなくなっています。価値が理解されないということ自体が、文化の断絶です。

攪乱…植物体の一部または全体を破壊するような外からの力のこと。植物が進化する過程で直面する自然淘汰の力は、主に三つあると考えられている。第一に資源をめぐる競争。第二に、植物の光合成・物質生産を抑制するような物理的な「ストレス」。そして、第三が、攪乱である。

生活の中でそのような自然を楽しむ、資源の恩恵に浴することも、ともになくなってきました。価値が認められなくなったので、河原をグラウンドやゴルフ場、駐車場にしたほうが人間にとって価値ある空間になると、一時期思われてしまった。そして、いつの間にか川の自然がどのようなものだったのか覚えていない人もいなくなっている、というのが現状だと思えます。

生物多様性を増すために 川とつきあうには

もし生物多様性という言葉で自然との共生、つまり「人がこれからも自然から多様な恵みを得続ける在り方」を模索していくのであれば、やはり、昔はどうであったか思い出し、縮小されてしまった川の自然の領域を増やす必要があるかと思えます。

生物多様性：「地球サミット」(ブラジル・リオデジャネイロで1992年に行なわれた環境と開発に関する国際会議)で結ばれた「生物多様性条約」によれば、「すべての生物(陸上生態系、海洋その他の水界生態系、これらが複合した生態系そのほかの生態系又は生育の場のいかんを問わない)の間の変異性をいうものとし、種内の多様性、種間の多様性及び生態系の多様性を含む」と説明されている。遺伝子の多様性、個体群の多様性、種の多様性、生態・生育場所の多様性、生態系の多様性、景観の多様性、生態的プロセスの多様性などを広く含み、「生命の豊かさ」を包括的に表す概念として用いられている。(鷲谷いつみ『生物保全の生態学』共立出版1999)

かつて、人は自然資源を利用する中で、自ずと自然環境に関する学習もしてきました。楽しむと同時に学んでいたわけです。複雑な自然界の中の仕組みを、自然資源を利用するという行為をとおして、自然に働きかけながら学んできました。その学びというのは、人類が人類として誕生してきたときから続いていたわけです。

人類はもともと果実や貝類を採集して生活し、やがて狩猟、そして農耕を始めましたから、自然資源とのつき合いはずっと続いてきたわけです。ところが、今はその行為をする場も機会もなくなっています。特に現在の都市生活者には、学ぶ場がほとんどありません。

川は都市にも流れていますので、そこに一部でもダイナミックな自然を取り戻すことができれば、川の自然と自然の恵みに触れる場としても役に立つのではないでしょ

うか。身近な川の自然と触れ合い、日常生活の中で自然とつき合うことが大切です。

攪乱は、マイナスというわけではない

江戸時代初期の関東平野では、いろいろな川が乱流し、氾濫原のままでは人は生活できませんから、河川の改修を行ないました。例えば、かつての荒川は雑木林と同じような機能を果たしていました。萱などの生産や生活のための資源を採取する場でした。

ときどき川があふれ、自然の植生を破壊する。この破壊を攪乱とい

います。

攪乱は、植物体を破壊する作用です。破壊ですから、生物多様性にはマイナス行為の印象を与えるかもしれません。しかし、実はそうではありません。自然界にも山火事や火山爆発や洪水など、攪乱の要素はたくさんあります。

人間にとつてそれは災害で、産業や生活にマイナスの効果をもたらしますが、自然を豊かにするという意味では、攪乱は非常に重要な要素です。

日本の場合でいうと、攪乱がまったくないと気候の影響で暗い森が発達することになります。攪乱作用があると、森の中に明るい場

所ができ、時間を経るにしたがつて、明るい森から暗い森までいろいろな環境が生まれます。攪乱の規模によって、さまざまなタイプの明るい林地ができ、時間とともに変化していきます。

生きものの中には、暗い森が好きなものがあれば、明るい場所でも旺盛に成長する生きものもいます。後者の代表は植物です。その植物に動物は依存しています。動物はある植物種しか餌にできなかったり、植物体がつくる構造を棲み処にして生活していますので、植物の多様性が増せば、動物の多様性も増すという関係になっているわけです。

さらに、自然の攪乱は、長い年月にわたつてその土地で繰り返して起こりますから、そこで生活している生きものは、その場所で適応進化しているわけです。つまり、攪乱は破壊する作用を持つていますが、生態系全体としてはマイナスの効果ではない。むしろ多様性を維持する要素として大きい機能を持つていているということです。

ですから当時の荒川は、自然の攪乱と、人が生活のために資源を採取することによって生じる攪乱がうまく作用し、生物多様性の高い空間であったらだろことが想像できます。



田んぼの意味

おそらく狩猟を始めた時期からヒトはただのほ乳動物ではなくなつて、自然界にさまざまな攪乱を与えてきました。

狩猟するために火を放つということも、かなり昔から行なわれてきました。火を放てば自然に与えるインパクトは大きいですが、ときどき野火が起こる火山地域では、野火は人が放った火と大差ない規模ですし、人口密度が低い時代は、あちらこちらで焼くわけではないですから、自然の攪乱としてよく起きることの範囲内といつてよかったです。一見インパクトが大きいですけど、それは自然によく馴染んでいて、むしろ攪乱が多様性を高めることに寄与しているかと判断することができます。

また、日本の原生自然の中には本来一時的に水浸しになる場所が

できたはずですが。これを「一時的水域」と呼んでいます。トンボや水生昆虫などはそのような場所に適応して生きてきたわけです。人がつくった「田んぼ」という一時的な水域を利用し、うまく棲み込み、そこを利用するものもたくさん出てきました。このため、しばらく前まで田んぼは生物多様性が豊かな場所でもあったのです。つまり、人の手が加わつていはいえ、田んぼはそれほど自然破壊的というわけではない。それは日本のもともとの自然の特性と、田んぼで行なう人の行為、攪乱の在り方、水の水位変動などの諸要素がかけ離れていないために、かつての氾濫原で暮らしていた生きものもあるものが、そこに棲み着いて繁栄できたといえるのです。

人間としては、ただ米をつくりたかっただけなのですが、自然に馴染んで暮らしていた時代には、図らずも生物多様性を高めること

につながっていたのです。

水田というのは、日本人にとっては大変有り難いものでした。なぜなら、主食をつくる場が、そのまま生物多様性の高い場でもあったからです。つまり、人と自然が調和できていた領域がかなり広がったのです。伝統的な田んぼを見ると、自然の機能の半分以上は保持されていると感じられます。現代の田んぼとなると話は異なりますが、昔の水田は自然の恵みの最たるものといっていいのではないのでしょうか。

自然の恵みは、計り知れない価値を持っている

自然の恵みは、財とサービスで説明されますが、私はもつと渾然一体としたものとも思っています。人は、河原に生えた葦や荻を利

用するために、刈り取ったり肥料をやったりする。それらの行為が、たまたまサクラソウなどの見た目も美しい植物の生育条件をつくり出したりしたのです。

葦や荻は財と捉えられます。また、葦や荻はサービスも供給してくれています。葦や荻のサービスは、水を浄化する機能などです。「三尺流れば水清し」という言葉がありますが、土の微生物の働きによって土水路のような所に水が流れれば、水がきれいになるという浄化の機能を意味しています。

生物多様性のある部分は、人の行為との比較でその価値を計ることができません。しかし、生きものそのものが多様な機能を持ち、生きもの同士の間にも多様な機能を持っています。さらには、私たちが意識していないこともありますので、現在の時点での生態系

の価値は計り知れないというのが、適切だと思います。ただ、貨幣価値で計らないと現在の世の中では納得しない方もいらっしゃると思いますので、その側面だけを取って「これだけの価値があります」ということは、説明としては意味があると思っています。

人と自然のかかわりの変遷

—— 海外を見ると、湿地と食料生産地とは必ずしも一致していません。

そうですね。例えば、小麦畑をつくるには、元の植生をまったく変えてしまいます。世界中で一番小麦が穫れるのは、アメリカ中部でミシシッピ川流域に広がるプレーリーという場所ですが、もともとは森林や草原がモザイクのように入り交じっていた自然でした。それをすべて破壊して、一様な小麦畑にしてしまった。これは、ある意味では大きな環境破壊となります。

このため1930年代には、ダストボールという環境問題が起きています。今まで植物に覆われていた所を畑にすると土が露出します。それが広がってしまったために、畑が砂埃地帯になり、農地と

して維持できない場所がたくさん出てきました。このため、開拓からたいして時間が経っていないにもかかわらず、農地を放棄する人が出てきたのです。

日本では、関西に同じ場所でも千何百年、田をつくり続けている例があります。それが可能なのは、水田というものが日本の低地の自然の一部を切り取ったものであり、大きく改変したものではないということが理由です。自然環境という面から見ても、無理のない形だったわけですね。

ですから、日本にはトンボの種類が豊かですね。200種近くいますが、ヨーロッパ全体の種類よりも多い。両生類も熱帯に匹敵するほど多い。トンボと両生類は、幼生期には水の中で生活し、大人になると森に出ていく生きものになります。この生態が田んぼに適しているからこそ、これだけ多くの種が棲息しているのです。

もともとの日本の原生的自然というのは、雨量の多い地域で地形が複雑ですから、森が発達しやすいのですが、森のそばに必ず湿地があるように、森と水辺の組み合わせが豊富な環境でした。水田と農用林や屋敷林が組み合わさる農業環境だったため、農業が盛んになっても、水と森が一緒になった環境が維持され続け、豊かな生態

系が絶滅しないで済んだのです。それに比べるとイギリスなどのヨーロッパでは、農地の開発が生態系の破壊という方向で進んだので、たくさん生きものが絶滅したため、固有の生きものが乏しくなっています。

とは言うものの、日本でも高度成長期以降は自然が豊かではなくなってきました。効率を高める農業を進め、自然環境にあまり目が向かなかつたからです。そして、水田というものが、稲を育てる場以外の機能を持っていることに意識が向けられず、他の機能を全部切り捨ててしまいました。水の管理もそうですね。田んぼの中には、他の生きものがいてはいけない、という発想だったわけですね。

昔ながらの耕作方法が残っているところは、遅れていると見られるかもしれませんが、かつての生きものの賑わいを残しているのです。生物多様性という点から見ると、整備された田んぼというのは、生きものの乏しい空間になっています。溜池なども同様です。

生きものの賑わいの価値

まだ気づかれていませんが、これからはそのような生きものの賑わいが、地域の資源になると思います。

自然の恵みの例

生態系が供給する有用物「財」

- ・食料
- ・燃料
- ・繊維
- ・建材
- ・薬用植物
- ・家畜や栽培植物の改良に役立つ野生生物遺伝子

生態系が提供する「サービス」

- ・水循環の維持
- ・気候の制御
- ・水と大気を清浄に保つ作用
- ・大気中のガス組成の維持
- ・作物や有用植物の授粉
- ・有用植物の種子の分散
- ・土壌の形成と維持
- ・河岸や海岸の侵食防止
- ・必須栄養素の貯留と循環
- ・汚染物質の吸収と無毒化
- ・農業害虫、雑草の防除
- ・紫外線からの保護
- ・感動、インスピレーション、癒し、研究の機会の提供

鷲谷いづみ『生物保全の生態学』(共立出版1999)



川を「里川化」する 水車の復元

「私の代^{だい}」という世代感覚を取り戻すために

かつての日本には水車が多数見られた。灌漑、揚水、製粉、発電…。水車は川や用水路から水力エネルギーを利用する貴重な地域資産だった。その水車を復元し、実際に取り付けて水車づくりの知恵を伝えているのが、佐賀県相知町の「自然と暮らしを考える研究会」だ。

水車が回ると、人々の川への思いはどう変わるのか？ 活動を引っぱってきた石盛信行さんの口から飛び出す「俺の代^{だい}で水車を絶やすわけにはいかない」という言葉を聞くと、「私の代^{だい}」という時間の感覚について考えさせられる。



里の技術を伝えるには
何が必要なのだろう

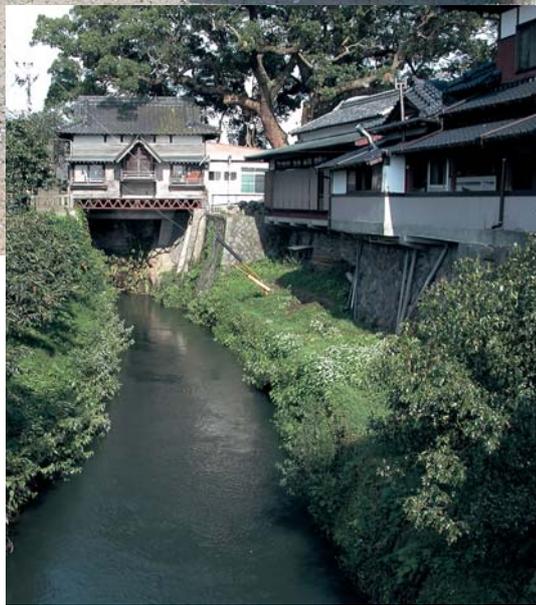
無形の技術や知識を伝えることは難しいものだ。読み書きの習慣や手引き書がない時代には、人は見て、話して、聞いて、技術を身体に刻み込んだ。無形の情報を伝えようと思えば、物として形に残したり、祭りのようにイベント化するしかない。

例えば、伊勢神宮では20年ごとに式年遷宮^{しきねんせんくう}が行なわれ、神殿を新しく建て替える。これなどは、建築技術を後世に伝える儀式としても機能しているのだろう。

法隆寺の宮大工棟梁として有名だった西岡常一は、かつてある古代の寺を復元するときに、「現代の宮大工の知恵で当時の姿を復元しておけば、それが何百年後であっても、工人が形を見て考え抜いて元の姿を復元することができると」という内容のことを話されていた。形になった技術を読み取るにも、技能のストックは必要ということ、専門技術とはそういうものなのだろう。

では、大寺院ではなく、里の小さな水車を復元する場合にはどうだろう。

かつて、日本中に身近な道具や機械として存在した水車が、現在



上：福岡県朝倉町の三連水車
 右：三連水車を回す堀川が筑後川から取水される山田堰
 左：堀川

は多くが姿を消している。今も水車大工と呼ばれる人が何人かいるが、そうした人の話を聞くと、水車づくりは特別な専門技術というよりも、あり合わせの知恵と技術をいかに巧みに在地の条件に合わせるかが勝負の分かれ目となるらしい。

人は、専門技術は努力して伝承しようとするが、手軽な技術は忘れてしまう。しかし、手軽な技術こそが、実は暮らしに多様な意味を持たせている、ということの水車は気づかせてくれる。

昔はいたる所に 地域固有の水車があった

今でこそ珍しくなった水車だが、かつては全国いたる所で水車は見られた。明治時代に陸軍省が調べた資料によると、1910年(明治43)は全国で約4万4000基の水車が存在していた。それほど身近であった水車が、この100年の産業化の過程で多くが姿を消してしまっただけである。

とは言っても、水車とは水力エネルギーを動力に変換する簡便な機械である。昭和30年代までは全国各地で使われていたのである。水車は、揚水、杵や臼、発電などに用いられた。北海道ではインディアン水車が遡上してくる鮭を

捕るのに使われている。ちょっと変わったところでは、鹿児島県知覧町や加世田市に伝わる「からくり水車」があり、水車動力で舞台上のからくり人形が踊るように複雑な動きを演じていく。水による回転エネルギーが、土地によってさまざまな異なる用途に用いられるのである。

こうした水車の中でも、現在有名なのが福岡県朝倉町にある三連水車だ。筑後川中流の山田堰から引き入れ川と並行して流れている堀川用水に据えられている。水車の直径は、それぞれ4.76m、4.30m、3.96mで、周囲の13.5haを灌漑している。三連水車がつけられた1789年(寛政元)までは二連で回っていたそうだ。

もともとこの水車が回っている堀川用水は、1663年(寛文3)に筑後川から水を引き入れて造られた。その後、水車が造られた翌年の1790年(寛政2)には、当時の庄屋が堀川の取水口に山田堰を造営している。

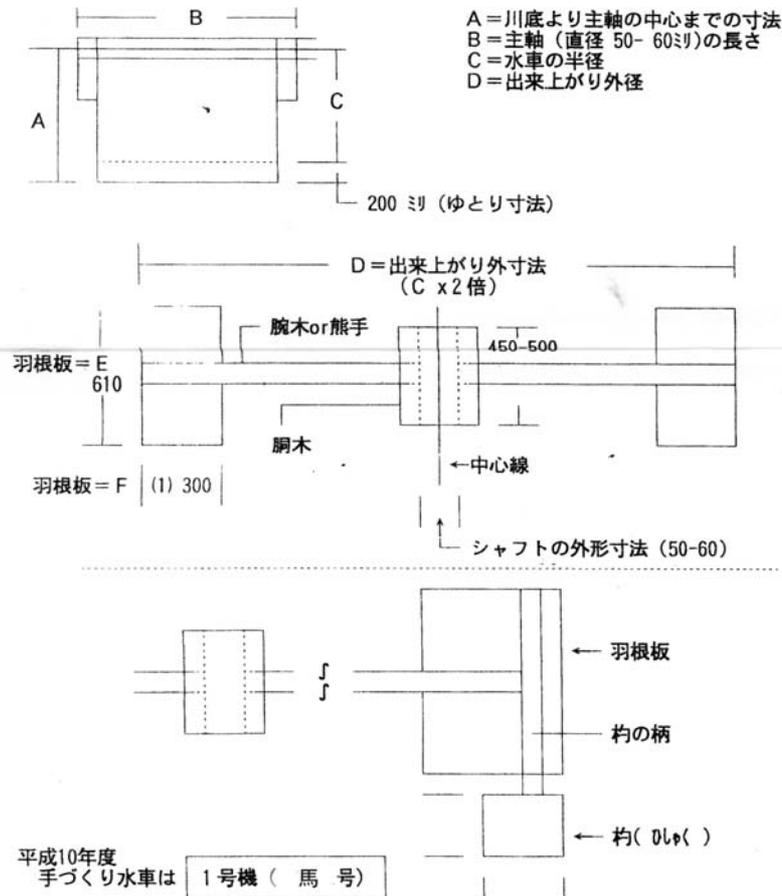
灌漑用途の水車は、水車そのものだけを見るのでは不十分だ。水車を回転させる川や用水と、周辺の田んぼを結ぶ水利ネットワークの中で機能している装置として見たときに、水をどのように利用してきたかという知恵と歴史がわかっていく。

(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1) ← 水車上流より 機械番号
鼠号	牛号	虎号	兎号	龍号	蛇号	馬号
A=1,480	1,680	1,670	1,900	1,850	1,480	1,500
B=2,250	2,100	2,200	2,150	2,150	2,140	2,200
C=1,280	1,480	1,470	1,700	1,650	1,280	1,300
D=2,560	2,960	2,940	3,400	3,300	2,560	2,600
E= 610					610	610
F= 300					300	300

(絵図面)

単位=ミリで

A=川底より主軸の中心までの寸法
B=主軸(直径50-60ミリの長さ)
C=水車の半径
D=出来上がり外径



上: 水車の設計図面。これだけの簡単な図面に、水車を造作する情報が込められている。この1枚からみんなが動き始める。

左: 自然と暮らしを考える研究会の石盛信行さん(左)と大草忠年さん(右)

右: 2003年5月に行なわれた水車の取り付け。子供たちも総出で体験した。(水車取り付け写真は「自然と暮らしを考える研究会」提供)

町切水車

このような水車を現代に復元し、町の宝として継承していこうと活動しているのが、「佐賀 自然と暮らしを考える研究会」の人々だ。研究会では、佐賀県相知町の町切地区にかつて多数あった水車を復元し、毎年子供たちと一緒に取り付けるイベントを行なっている。

相知町は、唐津市で玄界灘に注ぐ松浦川の中流に位置する人口約9300名の町だ。水車が回る町切地区は、この松浦川に合流する巖木川沿いに位置している。この巖木川の町切堰から引き込まれた用水路は川とほぼ並行して流れ、全長約5km。4つの集落の田んぼに水を供給し、再び巖木川に流れ込んでいる。この用水路に、現在、復元された6基の水車が灌漑水車として回っている。

水車復元の中心メンバーである石盛信行さんは、この町の出身。しかし、学校卒業後、いったん町を離れ大阪で働いていた。そして、1984年(昭和59)にUターンして町に戻り、公民館活動に従事するようになったのである。当時も水車はあることにはあったが、2基しか回っていなかったという。そこで、石盛さんたちはまず公民館活動の一環として、町に残る

里川の風景

堀割のまち柳川

福岡県柳川市は、有明海に面した人口約4万1000人の都市だ。無数の水路（クリーク）が広がる低湿地帯で、ここを人々が舟で行き来していた。と言っても、水が豊かということではない。逆に、低湿地で水が乏しく排水が困難なため、クリークに水を溜めているのである。

この地特有の治水・利水の仕組みに「もたせ」がある。水路にかかる橋の下の水路幅は、上向きに広がるようにせめられているが（左下写真、これは一時的に増加した水を溜めてゆつくり排水する治水システムや、雨や上流からの水をできるだけ滞留させて利用する利水システムとして機能する。いわば、水をゆつくり流す工夫だ。前述のせめられた水路を「もたせ」になっている」と言ったりする。

市内には樋門が449基あり、大雨が降ると行政の連絡を受け、樋門の側に住んでいる人などが開閉するので、どの樋門をどのタイミングで開閉するかもノウハウとして蓄積されていく。



ることがよくわかる。見上げるようなマンションもあれば、堀に向いた小ぎれいな住宅もある。郊外に向かうと、昔ながらのクリークが残るが、目を遠くに転じると、一面に整備された水田の向こうに県営集合住宅が島のように建っている場所もある。これが2003年（平成15）の柳川だ。

柳川には堀と暮らしが渾然一体となった個性があり、「水郷」「水の都」と呼ばれる景観を持っている。しかし、里とは人が住んでいる場所の意味であることを思いつく、今ここに住む人々が今後どのような暮らしを選び取るのが気になるところだ。2001年（平成13）に施行された「柳川市堀割を守り育てる条例（水の憲法）」は、「行政部門毎ではなく、関係者が一丸となって水問題に取り組み」ことが謳われており、里川づくりという点からも、これからの楽しみだ。



古文書などをもとに、巖木川の町切堰や用水路、水車について調査を始めてみた。すると、断片的ながらも、面白い資料とエピソードが続々と出てきたのである。

町切堰や用水路、水車は、どうも江戸時代、17世紀の初めごろに唐津藩主寺沢氏、大久保氏の新田開発の一環としてつくられたようだ。当時は35世帯が暮らしていた町切地区が、19世紀初めの文化・文政年間に60世帯に増えていたこ

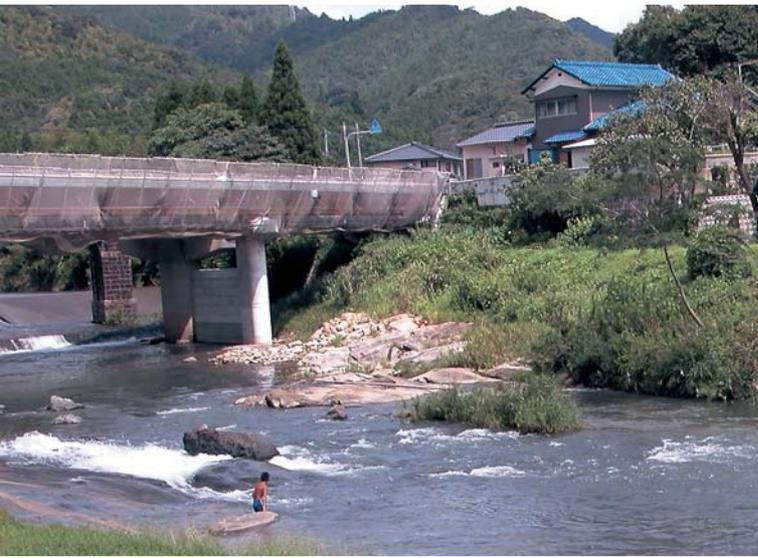
と。江戸時代には巖木川がすぐに氾濫し、稲作復旧もままならず、「砂押し」と呼ばれる年貢の免除があったこと。水車の管理は庄屋が行っていたこと。伊能忠敬も1812年（文化9）にこの地を測量して町切堰と川幅の記録を書き止めていること。時代は下り昭和30年代までは、5kmの用水路に稲作用水車だけでも20数基、米搗き水車3カ所、協同浴場用水車3、4カ所が存在していたことなど、この地区の人々の暮らしと川とのつながりの歴史が次第に明らかになってきたのだ。

石盛さんも「当たり前」と思っていた里の姿。その里が、先祖の暮らしの歴史が詰まった財産に見えてきた、再発見の瞬間だった。

水車復元体験イベント

先人の歴史に驚きを覚えた石盛さんたちは、1996年（平成8）に「自然と暮らしを考える研究会」を立ち上げ、98年（平成10）2月から水車の取り付け研修会を始めた。いつても、水車大工に専門的な技術を教わったというわけではない。最初の年だけ地主さんに取り付け方を教えてもらい、翌年からは毎年自分たちの力だけで付け替えを続けている。

精密な設計図でもあるのかとい



上：用水を引き込む町切堰。 下：用水路沿いには6基の水車が回る。



自然と暮らしを考える研究会ホームページ
<http://www11.ocn.ne.jp/suishu/>



うと、そんなことはない。ワープ口で打ったおおよその部品寸法資料1枚をもとに、あとはその都度集まり、材料を切り、組み合わせていく。もちろん、「濡れて木が膨らむことを念頭に置いて、ゆとりをつくれ」などのノウハウもあるにはあるのだが、けっして難しいというものでもない。

この水車取り付けには子供たちも参加する。研究会では地元小学校に出前授業を行なっているということもあり、毎年田植えが始まる1カ月前に行なわれる水車取り付けの日には、地区の住民がみんな集まり、近年では、町外からわ

ざわざ見学と体験に来る人もいるという。

今年2003年(平成15)は5月の日曜日に、用水路周辺の掃除と水車取り付けを行なった。集まったのは160名であった。

俺たちの代で
 絶やすわけにはいかない

水車が回るようになると、土地の人々の川への眼差しも変わってくる。石盛さんたちが子供のころは、川に入って遊んだそうだが、4年前までは誰も手入れをしないために、葎が生い茂り川面も見えない状態だった。1999年(平成11)から「会員」たちが河原の草刈りを行なって、子供たちが川に入れるようになった。

こうした試みも、地元の一部の人からは最初は「なにも、そこまでせんでも」と言われたという。「水車など地元のものにとっては珍しくないのだから、そっとしておけばよい」と思ったのかもしれない。

しかし、石盛さんは「これは人類の遺産。先人の遺産として、俺たちの代で絶やすわけにはいかない」と言う。

現在、メンバーの数は約20名。東京大学の研究生や国土交通省の協力で河原をシードバンクとして



里川の風景

棚田というストック

石盛さんたちに連れて行っていただいたのが、町切から山一つ隔てた谷沿いにびっしりと張りついた棚田だ。天水田で、山頂部にある溜池からも、一部水を引き、それらが谷底の平山川に合流している。

「おそらく、ここの辺りは、昔は農民の隠し田だったのでしょう。棚田がなければ、下流はすぐに洪水でしょうね」と言う。

「ここで40町歩の田んぼを持つ土井さん（左）の本業は建設業だ。『最近、ゆめしずくや、こしひかりを育てています。生活用水が入っていないのが謳い文句になっています』とおっしゃる。『でも、大変でしょう』と野暮な質問をする。『俺の代で絶やすわけにはいかないから、守っていかねばならないというプライドもあるし』と答えられた。この土井さんも、自然と暮らしを考える研究会の同志である。



活用したり、小学生と草花調査生きもの調査、水質調査なども行なっている。また、中学校とは職場体験学習として稲刈り学習や、田んぼの水がどこからくるかを探る「源流探し」を3日間にわたり行なっている。水車を出発点に、用水路と川全体で環境体験活動が広がっている。

石盛さんは言う。「4年前に葦の草刈りをして川面が見えてきたときに思ったのは、昔はもっと水があったということです。子供のころにはこの川の石で水切りをして遊んでいた。今、遊ぶ場として川を使ってもらえば、成人して一度はこの町を離れても、またこの川に戻ってくるかもしれない」

水車で伝えること

大規模で精巧な水車と異なり、町切水車のような灌漑水車ならば、専門的な技術がなくてもつくることのできるし、実際に据え付けることもできる。現在回っている水車は6基あるが、灌漑面積はわずか0・7haである。

にもかかわらず、石盛さんたちがこの水車で伝えることとは何なのだろう。

おそらく、それは水車づくりの楽しさなのではないか。水車取り付けが手軽で、みんながワイワイ

参加する作業だからこそ、子供も大人も自分の興味で水車づくりに協力できる。水車をとおして、用水路をつくった、かつての人々の生きるための知恵や苦勞もわかる。水車をとおして、稲作と土と水と生きもののつながりにも関心が向く。水車があり続けることで、いつの間にか川や用水路とのかかわりがどんどん生まれてくるのである。

最初は「水車を伝えること」から始まった活動も、楽しんでいううちに、「水車で伝えること」が次々と気づかれ、それが新たな川・用水の利用や企画に結びついていく。研究会の活動をうかがうと、手軽な技術を伝承する心は、技術そのものを楽しむ好奇心と、「俺たちの代で在地の宝を絶やすわけにはいかない」という気概から成り立っている気がしてならない。

町切水車は、水車復元という「みんなで行なう手軽な作業」が、単なる川を身近な里川に近づける効果を示してくれているのではないだろうか。水車づくりに参加した子供たちも、大きくなって「俺の代で…」と言い出すかもしれない。



里川の 構想

『水の文化』編集部

使いながら守る川「里川」

里川は里山の「山」を「川」に置き換えた造語である。

聞き覚えがない、と言われても仕方がないが、実は本家ともいえる「里山」自体がそれほど古い言葉ではないようだ。江戸時代に使われていたともいわれるが、昭和30年代後半に森林生態学者の四手井綱英が、それまで「農用林」とか「戸山」と呼んでいた居住地に近い森林を「里山」と呼ぶようになったのが最初らしい。

「奥山という言葉があるんだから、その対照で里山って言葉があっても言葉としてやさしいし、いいだろうと、山里をひっくり返して、集落や都市の近くにあつて人間が入ったり木の実を採ったり遊んだりできるところの山という意味で使い出した」と、森まゆみ『森の人 四手井綱英の九十年』（晶文社2001）の中で四手井が話している。



さらに『日本昔ばなし』ってテレビ番組みたいだね、集落があつて、小川が流れていて、向こうに里山が連なつていて、というのはちよつとユートピアみたいな感じがしますがね、人が山に入り、そのものを利用して生きていく以上、山は荒れざるを得ないし、人間が伐採したあとに別の木が生えて、二次林になり、植生も変わつていく。(中略)問題は、かつては里山があり農地があり、集落があつた。いまは農地がほとんど宅地になり、宅地が山まで迫つている。緩衝地帯がなくて、また灰などの加里肥料や人糞をリサイクルさせる所がない」と続けている。

一般に里山というと農の有無にかかわらず、手ごころな自然風景が

思い浮かぶ。しかし、里山は手を入れてはいけない森林ではなく、二次林だから天然林と比べ価値が劣るといってもいい。里山が貴重な自然であることは間違いないが、神棚に祭り上げるような森というわけでもないのだ。

将来の水資源を考える上で、里山がヒントを与えてくれる点は、里山が「使いながら守られた共有資源」であつたことと、「守る仕組みを持つていたこと」。つまりは、コモンズとして機能していったことにある。この2点が、里川としての水利用の管理に光を当ててくれるだろうことは、大いに予想できる。

もちろん「使わずに守らねばならない」原生自然があることは承知しているし、その判別もしなくてはならない。しかし、行政に厳しく管理された川と、ほとんど管理されていない川のどちらかしか目に見えない現在、当事者が「使いながら守る」ということを、現代の川でも考えてみることは大きな

実験になるのではないだろうか。もしかすると居住者と川との新たな関係が見えてくるかもしれないし、川という共有資源を自分たちで守る仕組みの輪郭が、浮かび上がってくるかもしれない。そこであえて「里川」という造語を使ったのである。

里川を、第一には居住地に近い川、第二には、多様な人々によって使いながら守られている川、という意味で使用してみたい。

里山はなぜ消えたのか

しかし、読者の中からは、こんな疑問が上がるかもしれない。「里山は都市部ではほとんど消えてしまつていないではないか。消滅を許してしまうシステムを川に応用しても、期待できないのではないか」と。確かに、そのとおりである。

ただ里山が消えた原因を追うと、まずまず「使いながら守る」ことの有効性を真剣に考えざるを得な

いのである。そこで、もう少し、里山の話を続けたい。

四手井の話から考えさせられることは、自然環境とつきあう際の「里」の意味である。

里とは人が住む場所、つまりは居住地のことである。別に農村を意味しているわけではない。里がたまたま農業集落であれば、その近くで共同で利用する資源としての農用林があつたし、それは農業を営む上では必要な土地利用でもあつただろうが、そのことは里山を農村と限定することにはつながらない。里山とは、居住地の近くという「空間的な意味」、生産や生活に必要な不可欠な肥料や薪などを利用した「資源としての意味」、そして、それを守る「居住者たちのルール」という三位一体の意味を持つて成立している「仕組み」なのである。

したがって、里という居住地が変貌すれば、里山も変わる。

昭和30年代の住宅需要増で都市近郊の不動産価格が上昇すると、



東京、渋谷川も里川だった



里山を利用してきた農業者も土地を手放し、そこには新たな居住者として多くの第二次、第三次産業の勤め人が住むようになった。さらに、農業のみで生計を立てることの困難さ、後継者不足などの要因が重なり、里山から資源としての意味が急速に薄れていった。かくして、里山は農業者とのかかわりがなくなり、都市近郊では里山そのものがほとんど消え、結果として現在では奥山近くに里山的な自然が残っているにすぎない状態になっている。

つまり、里が都市化し拡大していく中で、里の居住者が変化して、里山が伐採されたり都市の遠方に追いやられ、農業資源として居住者となつていった里山の意味さえも切れてしまったのである。

里山がなくなった原因は、システムにあるのではなく、居住者の

変化により土地の使い方が変わり、里山に資源を残しておく必然性を感じなくなった点にあるのである。

「里川」の場合

里山に起こったことと似たことが、居住地に近い川、すなわち里川でも同様に見られた。現在では大都市となつている都市近郊でも、昭和30年代までは、農業者をはじめ居住者がいろいろな形で川を使っていた。東京の昔の写真を眺めると、例えば、現在は首都高速道がかぶさっている港区を流れる古川で、石炭の積みおろしの姿が見られるし、現在は一面の宅地になつている渋谷や杉並の辺りでは、多くの農地で川が使われていた様子がわかる。現在でも、都市化がおよんでいない地方に行くと、「使いた川」という言葉で、農業用

水や生活用水に利用される川が残ってはいる。しかし、都市河川の多くは、蓋をされたり排水路となつていたりする。大きな河川は、河川管理者の厳しい管理下におかれ、都市居住者にとつて心理的な距離は必ずしも近いとは言えない。とは言いながらも、里山と川では、異なる点がある。

それは、少なくなったといながらも、まだ多くの川が実際に残っている点だ。それに、市民が意識するかしないかは別としても、上下水道などをとおして現代の都市居住者は川を利用しているのである。

現在、人口・住宅需要の増加もピークをすぎ、新たな里という居住地と川の関係を考えねばならない時期がきている。しかも、そこでは持続可能な成長が望まれている。現在、日本の人口の約7割が

都市部に居住している。川を「流域」としてとらえれば、下流に多数住んでいる都市的ライフスタイルの居住者を抜きにして、人間と川との関係を考えることは不可能だ。上流〜中流部の農家だけではなく、都市生活者をも、川とつながることで、いったんは切れかかつてしまった居住者と川とのかわりをもう一度つくつてみようではないか、というのが里川に込めた編集部の言い分でもある。

人々と川のつきあい 川は資源か

川は自然の資源という側面を持っている。しかし、一口に資源と言ってもいろいろある。ある人にとっては川の水そのものが資源かもしれないし、別の人にとっては川を泳ぐ魚かもしれない。農業用

水、航路としても重要だし、排水路、緑地、やすらぎを与える空間等々、さまざまな側面を持つている。

さらに、川には大小もある。また川は流れ下ること、一つの流域を形成している。その川に流れ込む堀や水路まで考えるならば、流域という川のネットワークの果たす資源としての役割はかなり広がることになるだろう。流域に住する人が増えれば、発電のために、上下水道の取水・排水路として、ヒートアイランドの緩和に、などと規模も大きくなり広がってくる。

このように「川は資源か」と問いかけると、答える側は「誰が、どのような用途で使うから重要なのだ」という理由を一緒に考えなければ答えられないということに気がつく。川の魚が資源だと答える人も、魚を食用としてとらえているのか、生物多様性を維持する指標としてとらえているか、釣りの対象としてとらえているのかで、立場が異なってくるのだ。



向一陽『日本川紀行』（中公新

書(2003)は太田川、最上川、石狩川、多摩川、筑後川の流域の暮らしぶりをルポしたもののだが、川がどのような意味で暮らしの資源としてとらえられるのかを気づかせてくれて、興味深い。

川とは多くの人とかかり合いを持つ、まぎれもない資源であるが、そこを使用する人、資源として見る対象、見込まれる用途などによって、資源としての質や内容が決まってくるものなのだ。

「消費」と「利用」は違う

なぜ、使いながら守ることが大事なのだろうか。このことを考えるとき、いつも思い浮かべるのは、唐突だが、地元のラーメン屋のことである。

最近、町にラーメン屋が出店してきた。これがなかなかおいしい。鼻^{ひいき}根にして通っていると、最初は客のほとんどが地元客である。「この店は自分が発見したのだ」という秘かな誇りもあるらしい。小さい店だがなかなか繁盛してきた。そのうち、その店がテレビで取り上げられ、翌日から店に行列ができるようになった。店の鼻根だった地元の固定客は、いつ行っても待たされる。待つなどということは、遠方からコストをかけて来るから引き返せないだけで、地

元の人間は「じゃあ、また来るか」と帰っていく。それがたびたび続くと「鼻根にしているのに、混んでいて入れない」と結局店から離れてしまうことになる。そういうする内に、一時は集まっていた遠来客も来なくなつて店がさびれるというのが大概の場合の結末だ。

雑ばくなことを承知で誤解を恐れずにいうならば、このラーメン屋は町の共有資源なのである。この例で考えさせられるのは、客にも2種類あるということだ。

一つは、遠くからやって来るような無責任な物見遊山の客。彼らは金を支払うことで「お客様」になっている。味を買いに来る「消費者」だが、店が続こうが続きまいが責任は感じない。

もう一方の客は、店主に義理があるわけではないけれど、店がなくなつたらやはり寂しい、困ると思つている鼻根の客である。彼らにとつて店は資源であり、彼らは店の「利用者」なのである。

もちろん、店の所有管理者はラーメン屋主人であるから、理屈から言えば、店を閉めようが他業種に衣替えしようが、店主の責任で自由にできる。けれど、「あの店を支えている一人が俺だ」と感じ鼻根に思う、いわば、ちよつとだけ責任を感じている客も存在するのである。

持続する店には、概してこの「利用者」が多い。

店主はこの利用者を大事にしないと生き残れない。鼻根の引き倒しをするような客もいるかもしれないが、そのような客とうまくつき合つていくことが、共有資源としてのラーメン屋を維持していく秘訣なのである。

利用客はラーメン屋に資源を発見すれば、鼻根にしても良いという誘因が生まれる。彼らが何度もしみを発見し始め、店はラーメン屋を維持するコストも下がる。

逆に、消費者ばかりがラーメン屋に通うようになると、店主も客を「一見さん」と見なし、文句を言わない効率的な客と見て、モラルハザードを起こす。そして、結局店は続かなくなる。一方、客は客で「そう頻繁には来ない店」と思えば、ちよつと店を汚してもいいだろうとか、煙草を吸つてほかの客に迷惑をかけてもいいだろうと、こちらもモラルハザードを起こしていく。

使いながら守ることが大事なのは、この「共有資源の利用者」を生み、育て、モラルハザードを起こすような人間関係を防ぐからであつて、これは川でも森でもラーメン屋でも変わらない。

川を介した

人々のつき合い

結局、川を共有資源として守るには、川に資源を見出す「川と人のつき合い」が必要であるが、それと一緒に、その資源を維持するための「川を介した人々のつき合い」がないと十分とはいえないのである。それはいわば、共有資源を守る仕組みである。

人々のつき合いの中で、協力関係を引き出すのに大事なことは何か。協関係の安定に不可欠なのは「未来の重み」と、「関係の継続」である。コンピュータのシミュレーションでこのことをわかりやすく説明したのが、アクセルロッド『つきあい方の科学』(ミネラルブックス1998)で、「これからも

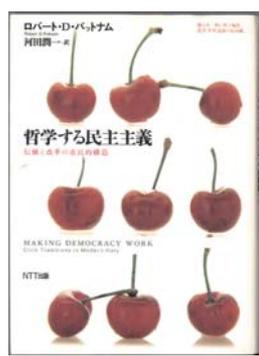


つきあい続ける」とか、「当分ここに住み続けるだろう」という未来の重みは、人と人の協力関係を生みやすいのである。つまり、変わらずに続けることが、結果として人々の信頼を招き寄せるということだ。

このことは、川を使いながら守る仕組みをつくる上でも、大変重要なポイントと思われる。

菅豊氏のインタビューの中で、「社会関係資本」(Social Capital)の話を紹介しているが、それもこのような信頼関係の話である。

人々がある共通の縁で結びついた人間同士のネットワークは、多様な信頼関係を生み、それが民主主義を円滑に機能させるといふもので、そのネットワークを社会関係資本と呼ぶ。このコンセプトを本格的に取り上げたのがロバート・D・パットナム『哲学する民主主義』(NTT出版2001)である(ただ、この邦題は意識すぎる。原題はMaking Democracy Work: 「民主主義を機能させる」という意味)。



コモンズにしても、社会関係資本にしても、関心が持たれる理由は、地域に応じて異なる人のネットワーク形成を誘導することで、持続可能な開発を実現するための資源管理組織をうまく機能させられるのではないか、という思いにあ

る。国連や世界銀行では持続的な開発を奨めるものにするために、社会関係資本を研究プロジェクトとして取り上げている。詳細は、<http://www.worldbank.org/portal/vertv/scapital/>を、ご覧いただきたい。

信頼は、つきあいの維持そのものから生まれるのである。

日本映画の名匠・小津安二郎は、自ら監督した映画『宗片姉妹』の中で田中絹代に「変わらないうってことが新しいことなのよ」という科白を与えている。小津自身の口癖でもあったらしいが、協力関係と信頼というテーマを考えると、なぜかいつもこの言葉が思い出される。

これからも都市は 変わり続けるのだろうか

考えてみれば、日本の都市ほど協力関係が生まれにくい場はなかった。明治時代以降、東京を中心とする都市は、田舎のしきたりが嫌で飛び出してきた人にとって自由の空間であった。常に変わり続けて、はじめとした人間関係がない場所のはずだったのである。特に戦後は、転勤などの雇用慣行の出現で、人口移動も頻繁になった。庶民の持つ蓄財もまだまだ少なく、未来の重みは今より軽かったと思

われる。

それに歩みを合わせるように、昔の建物が壊され、新たに建て替わえられ続けた。都市が建て替わるといことは、その社会が未来を軽く見ていることの表れである。居住し続けることで生まれる、空間や人間関係などの価値を、必要以上に割り引いて見ているからである。

サステイナブルな都市をつつうと、英国を中心にコンパクトシティと呼ばれる都市像が唱えられているが、その根底には、未来の価値を尊重することがあることを忘れないでいたい。

福川裕一・文、青山邦彦・絵、『まちに自然をとりもどそう』（岩波書店1999）は、未来を生きる子供たち向けに書かれた、まちづくりの手引き書である。ただ、その中身は川、水の通り道、住居、



それらがどのような歴史をたどってきたのかもおさえられ、里川を考える大変わかりやすい入門書となっている。里川は里山と同じよ

うに、居住地との関係を常に考えないとわかってこない。

人口増加にブレーキがかかり、時間の価値が高くなってきている今、都市は依然としてスクラップ・アンド・ビルドされていくのだろうか？ 私たちは暮らして川をどのように結びつけていくべきなのか。

「里川」の合意形成

川を流域で考えるならば、どうしても川に注ぐ流れまでも面であらねばならない。流域のどこに住むか、どのようにその川を利用するか、今後どのように居住者が管理すればよいのか。おそらく、さまざまな意見の違いが生まれるに違いない。それらも、結局は話し合いを「時間をかけて」続けることで解決するしかないだろう。

この「時間をかける」という表現も、非常に誤解を招きやすい。実は、時間をかけて、できるだけ多くの参加者の意見をジグソーパズルのように組み合わせれば、理想の川が描ける、というのは幻想にすぎない。むしろ多様な価値観を持って、混沌としていてまとまらない人々が、時間をかけて人の意見を聞き、自らの意見を話しているうちに、自分の感じ方や考え方が少しずつ変わり、結果とし

て意見を進化させて合意に向けて落ち着いていくとらえたほうが正確だろう。

このような合意形成の方法も、日本人は忘れてしまっているかもしれない。日本中を歩き回った民俗学者、宮本常一『忘れられた日本人』（岩波文庫版1984）の冒頭には、対馬での寄り合い風景が描



かれていた。二日以上も続けて寄り合いが行なわれていたのだが、みんなが納得するまで何日も話し合っている。と言っても、熱い議論が交わされているわけではない。端から見ると、雑談のようでもあり、用事のある者は途中で抜けても構わない。そのうち、昔のことをよく知っている老人が参考意見のような世間話をする。そしてまた、ひとしきり話をしているうちに、「まあ、あなたが言われるならば、もう誰も異存はなからう」と決まるのである。「話に花がさくとはこういうことなのだろう」と、著者は述べている。

正しいか正しくないか、得か損か、が第一なのではなく、そ

う感情が入り交じりながらも、互いが納得することが大事なのである。互いが納得するには時間がかかるのだということを、宮本常一の取材は、我々に思い起こさせてくれる。持続可能な社会を多様な意見でつくり出そうと謳っている今、かつての定住社会の慣習は、大きなヒントを与えてくれる。

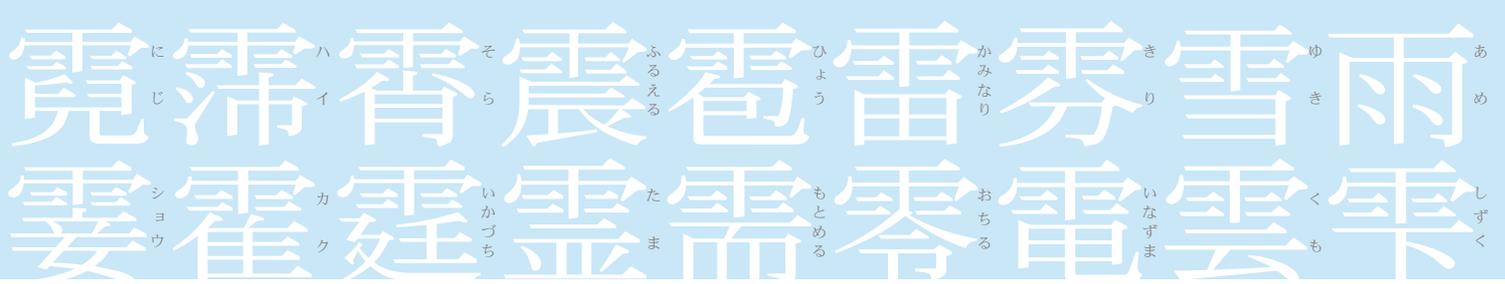
「里川」の構想

使いながら川を守る。そうした里川づくりは、まさにこれからの課題である。

このような視点に立った今、川の使い方はどのように開発したらいいのか。本号では、現在のいろいろな利用方法を紹介した。しかし上下水道や里川を維持させるための住宅やライフスタイルなど、今回触れることができなかった大きな問題も多い。さらに、「水みちも里川に含めよう」など、思い切った提案も出てくるかもしれない。

里川の構想は緒にいたばかりである。当センターでは、今後継続して取り組むべきテーマであると考えている。今回を出発点に、適時、活動内容をご報告していきたい。





水の文化書誌 ⑥ 《里川》

広辞苑には、里山は載っているが里川はない。日外アンソニエツ編・発行『河川大事典』(1991)によれば、里川という名の川は、茨城県見村、三重県熊野市、滋賀県水口町、京都府宇治田原町、和歌山県串本町、愛知県保内町、佐賀県伊万里市、長崎県田平町に流れている。村石利夫編著『日本全河川ルーツ大辞典』(竹書房1979)に、里川のルーツは「いくつもの里を縫って流れる川」とある。

井出彰著『里川を歩く』(風濤社1998)、『休日、里川歩きのおすすめ』(平凡社2001)は、石神井川、白子川、不老川などを歩いたエッセイである。川を歩いたとき、イメージが湧いてきた言葉が「里川」であったという。「里川」という言葉があってもいいと結んでいる。

さて、日本の里川を北から歩いてみよう。

堀淳一文・写真『わたしの北の川』(北海道新聞社1994)は、北海道の西別川、風蓮川、幌内川等30河川を取り上げ、濱田良平著『北海道静内川』(光村印刷1994)も面白い。函館・松倉川を考える会編『清流松倉川』(幻洋社1997)はダム問題で揺れている。

今尚志著『土淵川の橋』(北方新社1998)は、弘前市土淵川の橋を自転車で行っている。宮腰喜久治著『阿仁川たび』(森吉山ダム工事事務所1995)は、阿仁川が米代川の合流点まで描かれている。

仙台都市総合研究機構編・発行『広瀬川ハンドブック』(2000)は、広瀬川の諸元が記され、わかりやすい。伊達政宗は仙台城築城の際、広瀬川の上流から町中へ「四ツ谷用水」を引き、この用水は、農業用水、飲料水、防災用水の役割を果たした。仙台の発展の礎となり、「杜の都」の原風景をつくり上げた。この四ツ谷用水につ

いては、佐藤昭典編著・発行『もう一つの広瀬川』(1985)、『仙台・水の文化誌・続もう一つの広瀬川』(1994)があり、労作である。

須藤和夫著『三面川サケ物語』(朝風社1985)は、種川を拓いた青砥武平次から村上地方の三面川のサケ育成史を綴る。

福島県の河川については、吉田隆治編の『夏井川流域紀行』(1989)、『鮫川流域紀行』(1989)、『藤原川流域紀行』(1990)がいわき地域学会出版部から発行されている。2001年に出版された栗村芳實著・発行『那珂川を遡る』、『桜川・恋瀬川を遡る』、『濁沼川を遡る』は茨城県の河川である。地引春次著・発行『私たちの養老川』(1987)は、千葉県大多喜町から流れる養老川を舟で下った記録である。笹倉信行著『金沢用水散歩』(十月社1995)は、金沢の用水が図で表されている。

東京都内の典型的な里川に、野川がある。鏗山英次写真、若林高子文『生きている野川』(創林社1991)、その後の10年を追った同写真、若林高子編著『生きている野川それから』(同2001)は、野川の浄化をとらえている。

川とみず文化研究会編・発行の水辺のレポートとして『横浜帷子川をゆく』(1989)、『横浜ふるさと和泉川』(1993)がある。この書に「広重の絵はまぼろしか帷子川の水は濁りてうつつ流るる」(中野昇太郎)と詠まれているが、川とみず文化研究会は都市河川再生の活動を続けている。

このような河川再生の活動は全国各地で見られる。狭山市の不老川をきれいにする会編・発行『よみがえれ不老川』(2001)、よみがえれ元荒川の会編・発行『よみがえれ元荒川』(2001)、小林寛治著『よみがえれ生きものたち』(空



データで読む水の文化 水にかかわる生活意識調査から

当センターでは、毎年6月に「水にかかわる生活意識調査」を東京、名古屋、大阪の約600名を対象に実施し、7月にその結果を公表しています。これまでの9年間の調査結果はセンターホームページでご覧いただくことができますが、このコーナーでは最新の調査結果を選んでご紹介します。

現代人が水辺に抱く心象風景—子供たちに向け守るべきものとは

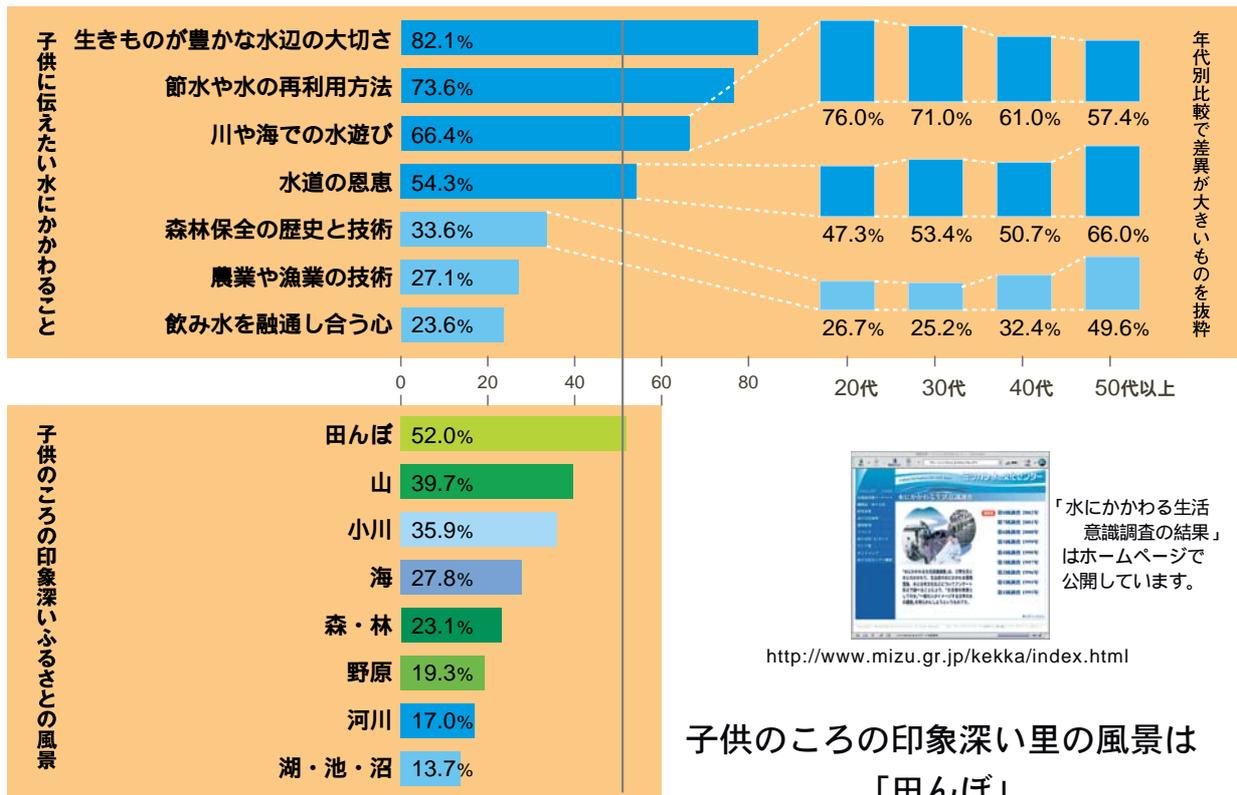
現代人は、水のどの側面を重視しているのか？ 里川を考える上で大事なことです。生活意識調査では、「子供に伝えたい水に関する事柄」を10の選択肢（複数回答）で尋ねています。この結果は、解釈によってはなかなか興味深いものです。

回答のトップは『生きものが豊かな水辺の大切さ』、以下『節水や水の再利用方法』、『川や海での水遊び』、『水道の恩恵』と続き、それぞれが50%を超えています。

都市部の居住者は、生きものが豊かで、川や海では水遊びができるような環境を守り伝えたいと考えていることがわかります。さら

に、節水や水再利用など、水道をも含めた「居住周りの水」も大事と考えています。現代の都市の里人が残したいと思っている「多様な生物がいる水」と「居住の水」という対比が、よく表れているようにも思えます。

『川や海での水遊び』『水道の恩恵』では、20代と50代の間で20%近い差が出ました。しかし、『川や海での水遊び』は20代のほうが大事と答え、『水道の恩恵』は50代のほうが大事と答え、世代による水や川とのかかわりが異なっています。これは、里川を考える上で大いに興味をそそられる数字です。



「水にかかわる生活意識調査の結果」はホームページで公開しています。

<http://www.mizu.gr.jp/kekka/index.html>

子供のころの印象深い里の風景は「田んぼ」

それでは、誰もがふるさとと答える心象風景というものがあるのでしょうか。子供のころの印象深いふるさとの風景を、10の選択肢から選んでもらいました（複数回答）。

1位は『田んぼ』、以下『山』、『小川』、『海』などと続きます。しかも、『田んぼ』はあらゆる

年代でトップを占めています。現在の暮らしはどうあれ、「田んぼ」は子供のころの印象深い里としてとらえられているのです。

田んぼの何が人の心に強い印象を与えるのかを探ることで、これからの里川の方角が見えてくるかもしれません。

■水の文化16号予告

特集「茶飲み話」(仮)

古今東西、独自のお茶文化が語れるほど
お茶は歴史ある身近な飲み物です。
いろいろな場所、いろいろな言葉で、
ちょっとお茶していかない？
と出会いが生まれたのでしょうか。
そんな「お茶コミュニケーション」
の社会史を取り上げます。



◆タマちゃんの出現で、期せずして都市河川に注目が集まった。一過性と思いきや、意外にもタマちゃん効果は持続している。やはり、生きものの持つパワーには、強く興味を惹かれるものが潜んでいるということか。里川を考えると、目の前にはタマちゃんさえ嫌がる川が存在する現実がある。「里川の空想」とならぬように地に足をつけた活動にしていきたい。(目)

◆里川は魅力ある言葉だ。この言葉で、川の持続的管理と都市・地域づくりを、コモンズの議論で積み上げ調和させたいものだ。前号のテーマは「盆地都市・京都」だったが、期せずして前号が「里川・空間編」、今号が「里川・人間居住編」になった気がする。両方併せて読んでいただくと、また違った面白さがあるかもしれない。(中)

水の文化 Information

『水の文化』に関する情報をお寄せください

本誌『水の文化』では、今後も引き続き「人と水との関わり」に焦点を当てた活動や調査・研究などをご紹介します。

ユニークな水の文化楽習活動を行なっている、「水の文化」にかかわる地域に根差した調査や研究を行なっている、こうした情報がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はモノクロで皆様に配布しておりますが、写真をはっきり見たい！というご要望にお応えし、11号からはホームページにてカラーでバックナンバーを提供しています。すべてダウンロードできますので、いろいろな活動にご活用ください。

ホームページアドレス <http://www.mizu.gr.jp/>

編集後記

◆年初の企画会議で今回のテーマが決まったとき、これは大変なことに取り組んだものだと少し不安を感じました。しかし、さまざまな識者のお話を伺ううちに、これは水の文化面のみならず将来の国家的課題として捉えるべきだと強く感じました。「里川とコンバクトシティ」は自然や環境、人間と社会が織り成す巧妙な協働作業であり、長期にわたって持続的に取り組むべきテーマです。(吉)

◆買い物やレジャーで車を使うことが多くなった。便利で行動範囲が広がる一方、大事なことを見落としてしまっているのではないかと不安も覚える。わざわざ遠くに行かなくても、近くに本当の豊かさがあるのではないかと、とも思う生活する上で心を癒す大事なものは、近くにありませんか？ただ傍観するだけではなく、積極的に関わっていくことで、面白いことを身近に発見したい。(目)

ミツカン水の文化センター機関誌

水の文化

第15号

ホームページアドレス
<http://www.mizu.gr.jp/>

禁無断転載複写

発行日

2003年(平成15年)10月 (第二版 2010年(平成22)2月)

企画協力

嘉田由紀子 京都精華大学教授 琵琶湖博物館研究顧問 水と文化研究会世話役
古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会
陣内秀信 法政大学教授

編集

吉田 稔 小林 信 日比野容久 小林夕夏 中庭光彦 賀川一枝 賀川賢明

発行

ミツカン水の文化センター
〒475-8585 愛知県半田市の中村町2-6
株式会社ミツカングループ本社 広報室内
Tel. 0569(24)5087 Fax. 0569(24)6353

お問い合わせ

ミツカン水の文化センター 東京事務局
〒143-0016 東京都大田区大森北2-2-10・4F
Tel. 03(5762)0244 Fax. 03(5762)0246



ミツカン水の文化センター

表紙上：東京の国立市、湧水からの流れが住宅街を駆け抜けている。

表紙下：生きた流れの持つ浄化力は、半端な衛生感を吹き飛ばす。水浴びの数m上流では、食器、鍋釜に始まり衣服の洗濯、自転車や家具まで洗う。包丁は研ぐし、オマルも洗う。

裏表紙上：東京は千駄木、谷根千工房（本文19～25p）の向かいにある須藤公園には滝がある。

裏表紙下：ノルウェーの港町オーレスンには、運河の舟運利用がまだ健在。フィヨルドの島から島へ渡るには、遠回りでも水面下数百mまで掘られたトンネルを車で抜けるか、個人の栈橋にも着けてくれる水上バスやマイボートを利用するかしかない。

